

成人

第六九号

巻頭言

成人会とは、成人に達した人の会ではなく、
成人をねがう人の会であり、かつそれが、
そのスローガンとするところであってほしい
と思うのであります。

目次

研究室より

贈る言葉

島田勝巳

・
・
・
一頁

読み書きが苦手な人へ

深谷耕治

・
・
・
二頁

【二〇二二年度 卒業論文 優秀作】

遠藤周作の信仰をめぐる一考察―「母なるもの」の理解を中心に―

大藪達行
・
・
・
三頁

天理教における「いんねん」と夫婦観

脇晴香
・
・
・
二五頁

二〇二二年度 宗教学科 卒業論文一覧

成人会より

今年度の活動をふり返って

六九代委員長

松川高洋テオ

・
・
・
三三頁

二〇二二年度 成人会役員名簿・成人会活動報告

・
・
・
三四頁

会員の声

・
・
・
三五頁

【研究室より】

贈る言葉

宗教学科主任

島田勝巳

今年もこの季節がやってきました。

この三月に本学を巣立っていく皆さんは、大学生活の半分以上をコロナ禍で送ったことになりました。おそらく入学した当初は、授業での新たな学びやサークル活動、新しい友人や恋人との出会いといった、楽しく華やいだキャンパスライフを想像していたことでしょう。そうした思い出を皆さんが実際にどれほどつくることができたかと考えると、少し気の毒な気持ちにもなってしまうます。

しかし、それでもこの四年間で、皆さんは入学前よりも多くの言葉を吸収し、人間関係を豊かなものにしながら、自らの視界や想像力を広げているはずです。自分ではそうした変化には気づかないかも知れませんが、それを実感する日がいつかやってくることを、私は確信しています。

三年目に入ってもいまだ終息が見えないパンデミックに加え、現在、欧州では第二次大戦後初となる戦争が起こって

います。この文章を書いている時点でもどのような終結を迎えるのか見えませんが、いずれにせよ今の世界は、さまざまな意味で、とても難しい時代に入っていることは確かです。

しかし、月並みですが大切なのは、「人生は長い」という未来への希望です。宗教学科を卒業していく皆さんに、自身の言葉に代えて、教祖のひながたから次の逸話を贈ります。それは、どんなに苦しい時も、心を倒してしまいうような節でさえも、やがてそれは過ぎ去り、必ずまた新しい時が訪れるという、確かな希望を抱かせてくれる言葉だからです。

ある時、数名の高弟が教祖の御前で、自分たちの講社が思うように行かないことを語り合っていると、教祖は次のようなお言葉をかけられ、お慰め下されました。

「どんな花でもな、咲く年もあれば、咲かぬ年もあるで。一年咲かんでも、又、年が変われば咲くで。」

『稿本天理教教祖伝逸話篇』、「二九八 どんな花でもな」

皆さんのこれからの人生に多くの花が咲くことを、心から願っています。卒業、おめでとう。

読み書きが苦手な人へ

深谷 耕治

私は本を読むのが苦手でした。小さい頃からあまり本を読んだ記憶がありません。

読むだけでなく、書くのも苦手でした。夏休みの宿題の読書感想文などではできるだけ先延ばしにしていました。

学生のみなさんを見てみると、私と同じように本を読んだり、文章を書いたりすることが苦手そうな人が大勢います。

いつも思いますが、どのようにすれば本が読めるようになつたり、文章が上手に書けるようになつたりするのでしょうか。

みなさんは、どうすればいいと思いますか？何かコツがあれば私が教えて欲しいです。そして、それが素晴らしいものであるなら、他のみなさんにもぜひ教えてあげて下さい。

今のところ、私に分かることと言えば、読み書きは決して簡単ではないことと、もう一つは、ある程度の量をこないといけないということでしょうか。

読み書きに限らず、どんな事でもそれを習得することは簡単ではありません。したがって、読み書きもきつとそうなん

だろうと思います。また、何事も慣れるまではある程度続けなければならぬので、読み書きも同じことなのでしょう。

何事も一朝一夕には身につかないということですね。

ところで、そんな私でも本を読んでいて、「なるほどなあ」と思ったことがあります。その考え方に感心したというか、自分の視界がパツとひらけたような気がしました。

その文章を書いた人はドイツ人。しかも百年以上前の人でした。つまり、百年以上前に書かれたドイツ語を誰かが日本語に翻訳して、それを私が読んで感激したということです。

少し不思議な感じがしませんか？

当たり前ですが、その人はもうこの世にはいません。死人です。しかし、その言葉はいまも生きていて、私の人生に影響を与えました。まるで死者に話しかけられたようなものです。しかも、遠い遠い外国の人。

そう思えば、いまこの文章を読んでいるということ自体も少し不思議な感じがします。

いまこの文章を書いている「私」はいつか死にます。しかし、私の死後、誰かがこの文章を読むとき、ここに書かれた言葉がその人に語りかけるかもしれません。

そう思えば、読んだり書いたりするということはある意味幽霊体験なのかもしれませんね。

遠藤周作の信仰をめぐる一考察

―「母なるもの」の理解を中心に―

大藪 達行

コメント

島田 勝巳

本稿は戦後日本を代表する作家の一人、遠藤周作のカトリック信仰について、主に彼の日記を一次資料としながら、小説のテーマとしても大きな位置を占めていた「母なるもの」の理解を中心に検討しようとする論考である。

第一章では、遠藤の受洗を一つの区切りとして、作家として歩み始めるまでの経緯を跡付けている。ここでは、西洋的なキリスト教を洋服に譬え、その着心地の悪さからそれを和服仕立てにしようとする彼の格闘が浮き彫りにされる。第二章では、遠藤の小説において鍵となる「同伴者」の意味を、「共苦者」としての「母なるもの」というイメージに重ねあ

わせ、それが彼の信仰の醸成においていかなる位置を占めていたかを、理論的省察と併せ、対談での発言などにも注目しながら明らかにしている。さらに第三章では、「共苦者」としての「母なるもの」のイメージを、彼の集大成となった『深い河』の分析を通して検討している。以上のような考察を踏まえ、結論では、遠藤が生涯を通じてもがき続けた自らの信仰的課題について、改めて検討されている。『深い河』においては、「母なるもの」が存在ではなくすべてを包み込む働きとして描かれ、遠藤にとってはそれが諸宗教の違いをも超越した表象である「玉ねぎ」として描かれている、としている。

遠藤周作の日記を丹念に読み込み、その信仰的な葛藤の経緯を明らかにした点は高く評価したい。「同伴者」、「共苦者」、「母なるもの」といったテーマを取り上げるのであれば、望むらくは初期の『沈黙』も検討の対象にできれば良かったかも知れない。とはいえ本稿は、キリスト者としての遠藤の信仰的課題を検討することで、筆者自身の信仰をも深く省みる絶好の機会になったはずである。この経緯を糧とし、今後も自らの信仰について、特に文字を通して省察することの可能性を広げて行ってもらいたい。

序

天理教の教会に生まれた私は、物心が着いた時から信仰を持って育った。そのため自身とは異なる、自ら求めて信仰を持った人に関心を抱いてきた。卒業論文では、そのような回心を経験した人の、その前後の意識の変化や、どういった背景のもとで回心が起こったのかということについて取り扱おうと考えた。そこで日本を代表するカトリック信徒の小説家であり、文化勲章を受賞した作家・遠藤周作を取り扱うことにした。しかし彼について調べていく中で、そもそも彼には劇的な回心を経験した過去は見当たらなかった。

遠藤は一二歳の時に母親に連れられて受洗した過去を持っていたが、彼は後に、「洗札を受けたというより、受けさせられた」と述べている。―それは自身の信仰心には関係のない、無自覚な受洗だったからである。

一九六七年のエッセイ『合わない洋服』の中で、彼はキリスト教のことを自分に合わない洋服に例えて語っている。

洋服は私の体に一向に合っていなかった。ある部分はダブダブであり、ある部分はチンチクリンだった。そしてそれを知ってから、私はこの洋服をぬぐうと幾度も思った。まずそれは何よりも洋服であり、私の体に合う和服ではないように考えられた。二

このように、キリスト教は自分にとっては着せられた宗教であり、自分の体にはどうしても合わないというを感じていた。しかし同エッセイで、「愛する者が私のためにくれた服を自分に確信と自信がもてる前にぬぎずてはとてできないかった」という理由から、合わない洋服を脱ぎ棄てない決心をしたことが述べられている。さらに、その合わない洋服を、人生をかけて自分に合う和服に変えていこう決心したと書かれているのである。

本論文では、遠藤が自分の体に合わない洋服と例えた西欧のキリスト教を、自身に合う和服に仕立て直していく過程に着目しながら、彼がどのような結果を導き出したかを考察していく。方法を以て、自身の最後の長編小説であり、集大成ともいえる『深い河』において、彼の宗教観のキーワードである「母なるもの」がいかに語られているかを検討する。そこでまず、第一章では『深い河』において、遠藤の人生が大きく投影されていることを踏まえ、彼のキリスト教との関わりに着目しながら、小説家デビューまでの生い立ちを振り返る。次に第二章では、松本滋の「父性的宗教」と「母性的宗教」に着目し、遠藤の立場を明らかにしたうえで、遠藤を支え続けた同伴者としての「母なるもの」について考察していく。さらに、第三章ではその「母なるもの」が、人生の集大成ともいえる『深い河』において、どのように現れているのかを明らかにしたい。最後に結論では、本論文の研究をとおして明らかになった点をまとめて結びとする。

第一章 キリスト教との出会い

第一節 洗礼まで

遠藤周作は一九二三年（大正一二年）三月二十七日、東京市巢鴨に父、遠藤常久、母、郁（郁子）のもとに生まれ、二歳年上の兄正介との二人兄弟であった。三

一九二六年（大正一五年・昭和元年）、三歳の年に、父の転勤に従い、排日運動が激化する満州の関東州、大連に父より少し遅れて移り住むことになる。そして、一九二九年（昭和四年）、六歳で大連市の大広場小学校に入学した。この頃、後に彼の作品のモデルとなる中国人のお手伝いの少年との出会いがあり、遠藤はこの人物から無垢な愛情をもって可愛がられた。四彼は、遠藤が親に怒られている時には間に入り遠藤をかばったりもし、その時の彼の眼が、遠藤の中に強く残ることになる。後に遠藤は、その時の彼の眼が「私にとってイエスの眼差しの原点になった」と述べている。五この頃母は、毎日ヴァイオリンの練習を朝から夕方までしており、遠藤は寒い日には指から血を出しながらも練習している姿に感動し、子どもながらに芸術の価値と厳しさを心に刻んだ。一九三二年（昭和七年）、九歳の頃から父母が不仲となり、遠藤は毎日暗い気持ちで通学した。誰にも哀しい気持ちを打ち明けることが出来ない中、その気持を隠すために、悪戯や

おどけをしたりするようになっていく。唯一哀しみを打ち明けられたのが、愛犬で親友のクロであり、クロだけが哀しみの同伴者となった。優秀だった兄に比べ成績は悪かったが、担任の久世宗一から詩や作文を書くように勧められ、始めて作った詩（「シュツ、マツチ。ポツ、ケムリ。タバコ、ノミタイナ。」）や作文（「どじよう」）が大連新聞に掲載され、母を喜ばせた。しかし、兄は六年間全甲（現代でいう成績オール五）で、総代級長と優秀だったため、遠藤は劣等感に悩んでいた。そんな遠藤に母は、「お前には一つだけいいところがある。それは文章を書いたり、話したりするのが上手だから、小説家になったらいい」と励ました。六

一九三三年（昭和八年）、一〇歳の年に父母の離婚により、母に連れられて兄と共に帰国することになった。神戸市の六甲小学校に転校し、伯母（母の姉）の関川家でひと夏過した後、西宮市夙川のカトリック教会の近くに転居することになり、その後、熱心なカトリック信者の伯母の勧めにより、母と兄と共に夙川カトリック教会に通うことになった。教会は他の子供達との遊び場となり、共に受洗のための勉強である公教要理を聞いた。しかし、これは自ら進んで聞いていたのではなく、聞かされていたという方が正解である。教会に行く理由として彼は、「当時は、教会の庭で野球をしたり、遊んだり、神父さんから菓子をもらったりするのがおもしろく楽しかったから、教会に行っていたのです。」と述べ、セまた公教要理の勉強に対しても、「神父さんの言葉で印象に残

っているとか、非常に感動したとかいうことは一つもありません。神父さんの話が終わると、後はものすごくあばれ回っておりまして。」と述べている。ハこのことから分かるように、遠藤は自ら信仰を求めて教会に行っていたわけではなかったのである。

一九三五年（昭和一〇年）、一二歳の年に六甲小学校を卒業し、その後兄と同じ私立灘中学校に入学する。この中学校は能力別クラス編成で、一年はA組、二年B組、三年C組、と下がり、四年と五年は最下位のD組であったが、一年の頃から「僕は小説家になるんや」と公言していた。母は宝塚市の小林聖心女子学院の音楽教師になり、五月二十九日に、同学院の聖堂で受洗し、その後につき、遠藤も兄と共に六月二三日、夙川カトリック教会で主任司祭永田辰之助神父より受洗する。洗礼名ポール。しかし、この受洗は自らの信仰の深まりによって得たものではなく、ただ母を喜ばせるための無自覚な受洗であった。「洗礼を受けた。いや、正確に語るならば「受けた」というより「受けさせられた」と言ったほうがいい。」九と遠藤も後に述べ、またその例えとして「見知らぬ女に横に來られて、今日から私があなたの妻ですと言われたようなもの」と例えを用いて述べているのである。一〇この無自覚な受洗が、その後の人生で遠藤を苦しめることになっていくのであった。二

第二節 洗礼後

無自覚な洗礼を受けた遠藤は翌年の一九三六年一月に、イエズス会の武宮隼人神父の瞑想会に出て感動し、自ら真冬の六時前に起きて教会のミサに通うようになる。そして、このような素直な信仰心を持ち、将来は神父になろうと本気で考えていた時期を経験する。しかし時間が経つにつれて「ミサでも、神父さんの言うことでも、ひとつひとつ〈距離感〉がある」と違和感を覚えるようになり、三キリスト教に疑問を抱くようになる。それは中学生の頃から始まり、そのキリスト教に対する違和感や距離感は次第に強まっていく。その違和感がきっかけとなり抱いた疑問を、人生を通して考えていくことになっていくのである。

一九三九年頃、西宮市仁川の月見ヶ丘に転居し、母は小林聖心の修道会のミサに毎朝通うようになった。そしてイエズス会の青年神父であるドイツ人のペトロ・ヘルツォーク（ペーテル・ヘルツォグ）と出会い、その指導の下、厳しい祈りの生活を始めた。その頃遠藤は母から、この世界で一番高いものは聖なる世界であることを教えられる。

一九四〇年（昭和一五年）、一七歳の年の三月に灘中学校を一八三人中一四一番目の席次で卒業する。前年の中学四年時に三高受験したが失敗し、この春も再度三高受験したが失敗に終わったため、仁川での浪人生活が始まる。三

一九四一年（昭和一六年）、一八歳の年の春、広島高校等を受験したが失敗し、四月に上智大学予科甲類（ドイツ語クラス）に入学することになる。母は苦しい生活のなか、遠藤の学費支給者となり、保証人および在京保証人は共に兄正介であった。同月、ヘルツォーク神父が上智大学文学部教授に就任する。遠藤は上智大学予科に籍をおきながら、旧制高校を目指して仁川で受験勉強に励んだ。しかし六月、突然すべてに對する空虚感こみあげてきた。特に受験勉強に對する空虚感は大きく、近隣の宝塚文藝図書館に通い、日本や海外の名作をむさぼるように読み始める。その結果、始めて小説の面白さを知ることになり、小説の世界にどんどん引き込まれていくのであった。

一二月には校友会雑誌「上智」（上智学院出版部発行）第一号に、論文「形而上的の神、宗教的の神」を發表する。この論文では、「人は理性で考えられた神では満たされず、神の实在感を実感としてもつことが必要である」ということが強調されており、^{一四}この問題は日本人である自分にキリスト教の神がどのように実感出来るのかという、生涯のテーマの根幹を貫くものであった。

一九四二年（昭和一七年）、一九歳の年の二月に上智大学予科を退学し、旧制高校を目指して仁川で再び受験勉強を続けるが、姫路、浪速、甲南等の高校を受験するも失敗する。兄と相談し、母に経済的負担をかけないために、会社員であった父の世田谷区経堂の家に移るが、母を一人孤独に残して、

母を捨て再婚している父の家庭での生活のなか、母を裏切っているといううしろめたさを毎日感じるようになる。^{一五}

一九四三年（昭和一八年）、二〇歳の年の四月に慶應義塾大学文学部予科に補欠入学が決まる。しかし、何の目的もなしに文学部に入学したことや、父が命じた医学部ではなかったため勘当され、友人の利光松男宅に転がり込み家庭教師等のアルバイト生活を始める。そして彼から入学金をかり、保証人になってもらって入学した。しばらくして、カトリック哲学者である吉満義彦が舎監を務める信濃町のカトリック学生寮の白鳩寮（聖フィリップ寮）に入り、そこで吉満から「哲学より小説や詩を書いたほうが良いかもしれない」と助言をもらう。その後吉満から亀井勝一郎を紹介され訪ねるのであった。この年、寮の年中行事で御殿場の神山復生病院にハンセン氏病患者の慰問に参加する。そこでハンセン氏病患者チームと野球の試合が行われ、試合中に患者からタッチされそうになった時に、怯えて固まってしまい、静かな声で「お行きなさい」と言われたことが、後年まで最もイヤな自分の原型がむきだしになった日として記憶に残ることになった。この出来事は後に作品にも反映されることにもなる。

一九四四年（昭和一九年）、二一歳の年の三月、吉満の紹介で堀辰雄を訪ねる。堀は同月に咯血し、六月より信濃追分に移るが、その病床に月に一度ほど訪ねるのが暗い戦時下での精神の拠り所となった。その後、堀から新著の『曠野』をサイン入りでもらって感激し、そこでモーリヤックの名やそ

の小説論をはじめ知った。そうした堀との会見やそのエッセイから、西洋人の神と日本人の神々との問題や、モーリヤックの小説論に注目して語られる人間の深層心理の問題、そして絶えざる勉強という作家の姿勢などを学び、決定的な影響を受けたのであった。^{一六}

戦局苛烈により文科の学生の徴兵猶予制が撤廃されたため、遠藤は本籍の鳥取県倉吉町（現・倉吉市）で徴兵検査を受けるが、二ヶ月前に肋膜炎を起こした後であったため、第一乙種で入隊一年延期となる。このような状況下だったため、授業はほとんどなく、川崎の勤労働員の工場で働くことになる。しかし、自分も一年後には戦場に出て敵を殺さなければならぬという悩みや、教会では「汝殺すなかれ」と教えられているのに、日本の教会は戦争に対し目を瞑っていることへの矛盾を感じるようになった。また「敵性宗教」を信じる非国民としてキリスト教徒が弾圧される中で、自分がキリスト教徒であることを隠す二重生活で苦しんだ。遠藤は後に、「学生時代には警察に連行されて「お前は天皇と、お前のアーメンの神とどっちを信じているんだ。天皇を神とおもっているのか」という愚問に答えさせられた。」^{一七}と述べていることから、当時の苦しさは何える。遠藤はこのような経験により、信仰上の悩みや疑問が強まっていった。そして、キリスト教を棄てれば苦しまなくてすむのではないかと考え、幾度も信仰を棄てようとしたのである。この頃、下北沢の古本屋でカトリック作家の問題に触れた『フランス文学素描』

を偶然見つけ、著者の佐藤朔が慶應義塾大学仏文科講師であったため、独語クラスであったにもかかわらず仏文科進学を決め、仏語を独習するようになる。

一九四五年（昭和二〇年）、二二歳の年の冬、まもなく入営させられるとの思いから、何もかも忘れて本を読むつもりで軽井沢と追分の間にある古宿という村で一ヶ月ほど過ごしながら、追分の堀の家に通った。三月、追分に行った夜に東京で大空襲があり、寮が閉鎖されたため、父からの許しもあつて、経堂の父の家に戻ることになった。同月に慶応大学文学部予科を修了し、四月に慶應義塾大学仏文科に進学する。しかし、目的の佐藤朔は病氣療養中であつたため、講義も四月より休講していた。夏休みには仁川の母の家に帰省し、日本の古典を読むなど烈しく勉強した。八月に、あと少しで一年の延期が終わって入隊という時に終戦を迎えることになる。その後、堀辰雄の紹介により、病氣療養中の佐藤朔に手紙を書くと、杉並の永福町の自宅に呼ばれ、以後、上級生の西洋史専攻の吉田俊郎と共に、佐藤の自宅で講義を受けた。そして、モーリヤックやベルナノス等のフランスの現代カトリック文学への関心を深めていったのであった。^{一八}

一九四七年（昭和二年）、二四歳の年に、角川書店でアルバイトをしていた上級生から、書店の顧問をやっている神西清が新人の原稿をみたいと言っているという話を聞き、神西から許可をもらい、一ヶ月程でエッセイを作成した。一二月には作成したエッセイ「神々と神と」が神西清に認められ、

「四季」（角川書店発行）に掲載されることになる。また佐藤朔の推挙で、「カトリック作家の問題」を「三田文學」に発表した。「神々と神と」では、自身が中学生の頃から感じていた西洋との距離感をより具体的に、汎神論的血統と一神論的血統を用いて述べ、また、カトリック者は本来、東洋的な神々の受身の世界を拒絶するものであるということが述べられている。そして「カトリック作家の問題」では、その距離感との向き合い方が次のように述べられている。

とまれ「我々がカトリック文学を読む時、一番大切なことの一つは、これらの異質の作品がぼく等に与えてくる距離感を決して敬遠しないこと」。この距離感とは、ぼく等が本能的にもっている汎神論血液をたえずカトリック文学の一神論的血液に反抗させ、たたかわせると言う意味なのであります。^{一九}

このように「神々と神と」や「カトリック作家の問題」で述べられている、西洋との距離感やそれらとの向き合い方は、遠藤の生涯を貫く問題となっていくのである。

一九四八年（昭和二十三年）、二五歳の年の三月、慶應義塾大学仏文科を卒業。卒業論文は「ネオ・トミスムにおける持論」を書く。神西清の推挙で評論「堀辰雄論見書」を「高原」三、七、一〇月号に発表した。この評論は「自分の『神々と神と』のテーマを一人の日本人作家の作品を土台として、も

っと詳しく発表してみたい」という考えから作られたものであった。二〇五月からは、ヘルツォーク神父が編集長となつて創刊された雑誌「カトリック・ダイジェスト」日本語版の編集を手伝うことになった。梅雨の頃、前年から鎌倉文庫に勤めていた友人吉田俊郎が自殺し衝撃を受ける。しかし、このような自殺の出来事を振り返り、後に「こうした身のまわりに起こった出来事のひとつ、ひとつが文学にたいする関心を深めた。」と述べている。^三

一九五〇年（昭和二十五年）、二七歳の年の六月四日、戦後初の留学生として三雲夏生・昂兄弟と共に、フランス船マルセイエーズ号で横浜港を出港した。遠藤の留学の目的は、フランス現代カトリック文学の研究であった。同じ船艙で寝起きする四等船客に、フランスのカルメル会修道院で修行を目指す井上洋治がいた。彼は後にも遠藤と深い交流を続け、遠藤の作品のモデルにもなる人物である。七月五日にはマルセイユに上陸し、二ヶ月間ルーアンの大家族のロビンヌ家に滞在した。遠藤はロビンヌ夫婦から我が子のように愛され感動した。一〇月よりリヨン・カトリック大学近くの学生寮（クワリッジ寮）に住んで、カトリック大学の聴講生となる。また、リヨン国立大学のルネ・バデイ教授の下でフランス現代カトリック文学の研究を目指した。しかし、留学中にキリスト教との距離感が深まるなかで、仏文科の研究を進む方向は放棄され、距離感のあるキリスト教を身近なものにするという自分だけのテーマを背景に背負つて小説家になろうと決心

をするのであった。そして、屋根裏部屋での孤独な生活の中で小説を書くための勉強に打ち込んでいくのである。

一九五一年（昭和二六年）、二八歳の年の三月にアルデツシュ県の寒村フォンスに行き、抗独運動者が同胞のフランス人を虐殺してその死体を棄てたという井戸を見ている。その後リヨンに戻り、原民喜の自殺を告げる手紙と遺書を受け取り、衝撃を受けた。八月にはモーリヤツクの『テレーズ・デスケルー』の舞台ランド地方を旅し、オールドー近郊ブリュツセ村のカルメル会修道院で修行中の井上洋治を訪ねる。その時、キリスト教との距離感に苦しんでいた遠藤は、修道士である井上の清らかな信仰に感動し、彼の信仰に憧れを感じた。

二三 そんな中、一二月から血痰の出る日が続くようになる。

一九五二年（昭和二七年）、二九歳の年の春休み後から息苦しい日が続くようになり、またしても血痰が出た。医者の方診の結果、三ヶ月の療養を命じられるが、六月には多量の血痰を吐き、九月までスイスとの国境近くのコンブルの国際学生療養所で過ごすことになる。九月下旬、リヨンに戻るも今度は喀血し、一〇月にパリの大都市にある日本人留學生のための宿舎の日本館に移ることになった。一月には烈しく咳が出るようになったため検診を受け、検診の結果、肺に影が見つかり、大学都市にあるジュールダン病院に入院することになった。^{二三}

一九五三年（昭和二八年）、三〇歳の年の一月八日に帰国のため退院し、翌日に結婚まで考えたソルボンヌ大学哲学科

の女子学生フランソワーズ・パストルとマルセイユまでの旅を共にした。同月二日、二年半のフランス留学を終え、日本郵船の赤城丸で帰国の途に就く。この二年半の留学について、遠藤は後に「留学したことは、後の私の小説のほとんどテーマの種になったとおもいます」と述べている。^{二四} 帰国後は父の経堂の家に戻り、療養生活を過ごした。一年間は体調が回復せず、毎週気胸療法に通い、寝ていることが多かったが、四月にはヘルツォーク神父に代わり「カトリック・ダイジェスト」の編集長になった。一二月二九日、母はヘルツォーク神父との口論した後、部屋に戻って脳溢血で倒れ、急死する（五八歳）。臨終に間に合わず、愛着をもっていた母の孤独な死は後々まで影を落とすことになるのであった。

一九五四年（昭和二九年）、三二歳の年の四月に奥野健男の勧めで「現代評論」に参加し、創刊号（六月）と第二号（二月）に「マルキ・ド・サド評伝」を発表する。七月に最初の評論集『カトリック作家の問題』を早川書房より刊行し、八月には伊達龍一郎のペンネームで小説「アフリカの体臭」（オール讀物）を発表する。そして一月には初の小説「アデンまで」を「三田文學」に発表した。^{二五}

第二章 同伴者

第一章で述べたように、遠藤は、西洋との距離感を留学に

よって痛感し、母親によって着せられたキリスト教という洋服を、生涯をかけて自分に合う和服に仕立て上げようと試みた。そうした試みを紐解いていくなかで、「父性的宗教」と「母性的宗教」が重要なキーワードであると思われる。以下ではこれらのキーワードをもとに、遠藤を支え続けた「母なるもの」について考察していく。

第一節 父性的宗教と母性的宗教

『神々と神と』でも述べられているように、遠藤は大学生の頃から、キリスト教が日本人に浸透しないわけは、そもそも日本人と西欧人では流れている血液が異なるためと考えていた。ここで血液とは、人間の体内を流れている血液ではなく、伝統や思想、また無意識下に潜むもののことである。従って、日本人と西欧人とは同じことをしていても根本的に血液が異なるため、理解しきれないことがあると遠藤は考えた。^{二六} 『神々と神と』では、日本人は神々の子であるため汎神論的血液が流れている一方で、西欧人は神の子であるため一神論的血統が流れている。だから相交わることは難しいと述べられている。モロしかし、それだけではなく、西欧と日本では「父性的宗教」と「母性的宗教」という問題があり、これらの関係もまた、交わるのが難しい要因の一つである。松本滋は、人類学者・石田英一郎の「遊牧文化型」と「農

耕文化型」という二つの文化の型を大筋において宗教に対応させ、「父性的宗教」と「母性的宗教」という対概念を設定した。ここでは、単に遊牧的対農耕的などの文化様式や風土上の対比にとどまらず、それらをさらに深い人間の深層心理にまで掘り下げ、フロイトの精神分析をはじめ、様々な社会科学者や思想家たちの理論的功績を土台にしなが、概念化を試みたのである。

「父性的宗教」と「母性的宗教」が誕生した土地柄を対比して考えてみると、文化や伝統、思想などが異なる。それらを文化の基本的二種類型のプロトタイプに分けたものが、石田の遊牧文化型の世界観と、農耕文化型の世界観との間のコントラストである。石田によると、それぞれの特徴は、まず遊牧文化型においては、宇宙を超越した絶対者としての神の観念が支配的であるのに対し、農耕文化型では、宇宙の中に人間と共々にある神の観念が優越している。前者には天の思想が支配的に結びついているのに対し、後者では大地の思想が基本的である。また、他者に対する態度として、遊牧文化型は一般的に不寛容と非妥協性を特色とし、農耕文化型では寛容と融通性を特色としている。石田によると、遊牧文化型の流れを汲むものは、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教などであり、一方、農耕文化型の流れに属するものは、ヒンドゥー教、仏教、道教、あるいはユーラシア大陸に多く見られる古代宗教である。^{二七}

松本は上記で述べた、石田の二つの文化型を大筋において

宗教に対応させ、「父性的宗教」と「母性的宗教」という概念を設定した。「父性的宗教」とは、父性的な原理に基づいた宗教のことである。人間の親子関係で考えると、子どもは父親に対して両極的な愛と憎しみ、尊敬と敵意というような錯綜した感情を持っているが、やがてそれが抑圧されていく。そしてその過程で、父性的権威が超自我（内なる父親）として内面化され自分のものとなり、自分が自らを律することが出来るようになる。このような宗教では、神々や究極者は、強力な権威や権力をもった支配者であり、又は超越者として描かれている。ここでは階層的なものや禁欲的なのが強調されており、それらによって自らを厳しく律していくことが大切だとされている。一方、「母性的宗教」は母性原理に基づいた宗教であるとした。これは人間がまだ母親のお腹の中にいる時のような、また、生まれて間もない時期の自他が分化されていないような「母子一体」の関係に結びついているとする。つまりそれは、無条件的な包容性や寛容性を特徴としており、我が子であるという事実の故に愛する、母親的な愛につながるのである。「母性的宗教」では、神々や究極者は、強力な権威や権力をもって特定の目標へと人々を導いていくのではなく、むしろ共同体の調和統合をはかり、その緊張を緩和するような存在、あるいは仲介者の象徴とされている。こうした宗教では、無条件的な愛が強調されている。一方、心理学者・河合隼雄は、人間の心の中では父性原理と母性原理は対立関係であり、世界でも同様のことが言える

とした。そして、世界における現実の宗教、道徳、法律などの根本において、ある程度の融合を示しながらも、どちらか一方が優勢であり片方が抑圧されている状態で存在していると考えた。そのうえで河合は、日本の傾向は母性的な面を優勢していると考えた。三〇

遠藤周作自身も松本滋の『宗教心理学』を読み、「父性的宗教」と「母性的宗教」について学んだ結果、自身の立場は「母性的宗教」により親近感を持つものと自覚する一方で、父性的宗教はあまりに西欧的、一九世紀的すぎたとした。また、現代日本人に合うのは「母性的宗教」だと考えた。三一

第二節 「母なるもの」

第一節で論じてきたような、「父性的宗教」に対比される「母性的宗教」あるいは母性原理は、遠藤の思想において、具体的にどのようなように表れているのだろうか。

遠藤は言語学者・井筒俊彦との対談の中で、「日本人にあって宗教は、人間を許し、包み慰めてくれる「母の宗教」であり、怒りや罰の「父の宗教」ではないという考えにたどりつきました」と述べている。三二このように、遠藤は母性原理に親近感を示しているが、彼の人生においてこれが意味することとはどのようなものだろうか。これを紐解くには、母性原理が投影された「母なるもの」の存在が必要不可欠であ

る。何故なら、この「母なるもの」の存在こそが、遠藤を包み慰め、支え続けた存在だと考えるからである。

遠藤は一九五〇年からのフランス留学中、病に苦しみ、死の恐怖と闘う時期を経験した。この時、遠藤を支えたのは聖母という「母なるもの」の存在であった。遠藤はこの時の聖母に対する気持を、「ぼくの聖母に対する信仰はどうしてもなくならない。ぼくはわるい事をした時、困った時、くるしい時、聖母に祈る。聖母は、必ずきてくれる。」と日記に記している。^{三三}この「聖母は、必ずきてくれる」という一文は、父なる神ではなく、遠藤が重きを置いている「母なるもの」の愛に対する率直な感情ではないだろうか。またそれだけでなく、この言葉には苦しい時はいつも側にいる、という「共苦者」としての意味も含まれるように考えられる。この共苦者としての働きは、遠藤の「母なるもの」の理解において非常に重要であると考えられる。

「聖書のなかの女性たち」を書きながら私が血漏を患う女とキリストとの出あいの中で描写したのは「苦しみを分かちあおう」とするこの連帯感である。

(中略)

彼は人々のそばにいつもいる。彼等の手を握る。人々のくるしみはそれぞれによって違うが、彼はそのすべてを引きうけようとする。病気の苦しきも……みなから嘲られた苦しきも……愛の苦悩も……そして最後の死の恐怖さえも

引きうけようとする。三四

このように、遠藤の描いたキリストには、苦しみを分かち合おうとする共苦者としての働きがあった。

哲学者・柳宗悦は「悲しさは共に悲しむ者がある時、ぬくもりを覚える」という。^{三五}遠藤にとつての「母なるもの」も、共にということが大切であり、共に苦しんでくれる存在が、同伴者として遠藤を支え続けたのではないだろうか。

第三章 『深い河』^{ディープ・リバー}における「母なるもの」

『深い河』は一九九三年、遠藤周作七〇歳の年に刊行された最後の長編小説であり、英語にも翻訳されている作品である。遠藤は『深い河』には、「私の大部分が挿入されている」と創作日記に書き残しており、また、「今までの自分の文学の総決算」だとも述べている。^{三六}というのも、この小説の登場人物である一人ひとりが担う主題や性格、エピソードなどは、これまでの様々な作品で描かれた人物たちと繋がり、さらに著者のこれまでの人生を織りなした真実が、作中人物一人ひとりに投影されているといった凝った構成からわかる。^{三七}遠藤の代表作といえは『沈黙』（一九六六年）と考えられているが、この『深い河』も代表作の一つと言われており、遠藤自身も、「自分の棺には『沈黙』と『深い河』の二冊を

入れてほしい」と言うほど思い入れが深かった作品である。文芸評論家・若松英輔は、この遠藤の言葉に対し、「遠藤自身も作家としての自らの生涯はこの二冊に収斂されていく、と感じていたのだと思う」とし、^{三六}また、「『深い河』は、物語の姿をした遠藤周作の精神的、さらにはえば靈性的自信でもある」と述べている。^{三七}さらに彼は、「この作品に現れた問いから遠藤周作の文学を読み解くことで、この作家が終生問い続けたことが何だったのかをとらえ直すことができるように思う」とも述べている。^{三八}このように『深い河』は作家・遠藤周作の人生の集大成ともいえる作品である。では一体、これまで述べてきたような「母なるもの」の働きは、この作品においてどのように現れているのだろうか。

『深い河』には、主に磯辺、美津子、沼田、木口、大津という五人の主人公的登場人物がおり、それぞれが、それぞれの思いや苦しみを胸にインドへ導かれていく。これらの人物に共通している主題は、「失われた愛を求めて」彷徨うということであると遠藤は述べている。^{三九}そうした主題を胸に大津を除く四人は同じインドでの旅路を共にするのである。

磯辺は老年にさしかかった男性で、家庭を顧みず仕事を優先するような堅物であった。ある日、突然妻をガンで亡くしてしまいが、彼女が死に際に言った「わたくし……必ず……生れかわるから、この世界の何処かに。探して……わたくしを見つけて……約束よ、約束よ」^{四〇}という言葉が磯部の耳に焼きつく。妻を失ってからは悲しみや喪失感、空虚感に苛ま

れる日々が続くが、そんな中、アメリカで生まれ変わりの研究が行われていることを知り、生まれ変わりや輪廻転生といった非合理的なものに捕らわれていくようになる。そしてその研究がされているヴァージニア大学に「日本人の生まれ変わりはいるのか」と問い合わせをする。すると、「ガンジス河のほとりのヴァーラーナサイという村に、日本人の生まれ変わりを発見した」という手紙を受け取る。自らを無宗教という磯部だが、自分でも不合理だと思いつつ、妻の生まれ変わりを探しにインドツアーに参加することになった。

美津子は強い空虚感を抱える三〇代の女性である。彼女は大学生時代から、「自分は人を愛することができない」とか、「自分の欲しいものが何かわからない」といった空虚感に苦しんでいた。そういった感情を誤魔化すために、大津という冴えない男の心をもてあそび、神父を志す彼からキリスト教を奪おうとした。結果的には、美津子は大津の誘惑に成功し、大津がキリストを棄てたと判断した彼女は、彼をポロ雑巾のように棄てたのであった。しかし、その後も、大津の言葉や存在に捕らわれてしまい心から離れない。ある日の同窓会で、大津が神父になりインドの修道院にいますという噂を聞きつける。不可解な自分を知るべく、自分の心の闇を探るべく、美津子はインドツアーに参加したのであった。

沼田は童話作家の中年男性である。幼いころに満州で生活をしていた頃、両親の不仲により悲しく孤独な日々を過ごしていた。孤独と悲しみを打ち明けられる相手は、捨て犬のク

ロだけであった。クロだけが哀しみの理解者であり、同伴者であった。そんな幼少期を送った沼田にとって、唯一の理解者はいつも動物であり、その影響により童話では人間と動物の魂の交流を描いていた。ある日、若いころに患った結核が再発し入院することになる。ここでも自分の苦悩を誰にも言えない沼田は、妻に買ってもらった九官鳥だけに、その思いを吐露することができた。しかし、その九官鳥は、沼田が手術を受けている最中に、餌のやり忘れにより死んでしまう。仕方ないと諦めていた沼田だったが、自分が手術中に心停止を起こしていたことを知り、「九官鳥は自分の身代わりになってくれたのだ」という思いが強まっていく。せめてもの九官鳥へのお礼に、「インドで一羽の九官鳥を得て、保護区に放してやろう」と思い立ち、インドツアーに参加することを決める。

木口は戦時中にビルマの作戦に参加した過去を持つ老人男性である。ビルマの作戦では豪雨、飢餓、怪我、疲労、マラリヤなど、極限の状況下で、次々と命を落としていく仲間達の姿を目の当たりにした。そんな中、自らもマラリヤにかかり命の危機に陥ったが、戦友の塚田の助けによって一命をとりとめた。敗戦後、東京で塚田に再会するが、彼は酒に溺れていた。その結果、酒が原因で肝硬変となり、さらに食道静脈瘤を患い入院することになった。命の危険があるため禁酒を告げられるも、「それはできない」と頑なに禁酒を拒み続けた。その理由がビルマで戦友の肉を食べたことへの罪悪

感であることを、木口は知らされる。それは瀕死だった木口を助けるためでもあったのである。死期を迎えた塚田は、改めて自分が戦友を食べたことを告白して亡くなった。木口は塚田を始め戦友達を弔うため、仏教の発祥地であるインドへのツアーに参加したのである。

大津は美津子と同大学出身の同世代で、母の影響によりキリスト教徒となり、神父になった男性である。大学時代は貧弱で外見も悪く、気弱なため人付き合いも苦手であった。そんな彼は今後礼拝堂に行かないことを条件に、美津子のボーイフレンドとなる。しかし、それは弄ばれていただけであり、結局はポロ雑巾のように棄てられるのであった。途方に暮れる大津であったが、美津子に棄てられたことがきっかけとなり、キリストへの思いはいつそう強くなっていき、その結果フランスにキリスト教の修行で留学することになった。しかし、日本人の自分には合わないヨーロッパの合理主義への違和感を覚えるようになる。「ぼくはこの人たちのように善と悪とを、あまりにはつきり区別できません。善のなかにも悪がひそみ、悪のなかにも良いことが潜在していると思います」とし、^{四三}また、「神は色々な顔を持っておられる。ヨーロッパの教会やチャペルだけでなく、ユダヤ教徒にも仏教の信徒のなかにもヒンズー教の信者のなかにも神はおられると思います」^{四四}という信念を抱くようになる。その結果、神学校の先生たちには汎神論的だと批判される。それでも自身の信念は消えることなく、「ぼくはヨーロッパの基督教を信じ

ているんじゃないやありません」^{四五} という思いが強まっていき、やがて日本に戻ったら「日本人の心にあう基督教を考えたい」^{四六} と思うようになる。このような自身の考えを神学校の先生や先輩たちに訴えたことで、大津は異端的扱いをされるようになる。その後インドのガンジス河付近の修道院に入るも、そこでも同じように異端的扱いをされ追い出されてしまう。そして、ヒンズー教徒たちの集団に受け入れてもらい、病や貧しさから息絶えた人たちの死体を運び、火葬してガンジスに流す仕事をするようになる。それはまさに、キリストの愛の真似事であった。

この五人の主人公は、それぞれの過去や思い、目的を胸にインドへ導かれる。磯部は亡くなった妻の生まれ変わりを探すためであり、美津子は自分の心の闇を探すため、沼田は九官鳥への恩返しのためであった。さらに木口は戦友達を供養するためであり、大津はキリストの愛を実践するためであった。五人がインドにやってきた理由はそれぞれ異なるが、上記でも述べたように遠藤は、その共通点が「失われた愛を求めて」彷徨うことであるとしている。しかし共通点はこれだけではないと考えられる。それは、五人がそれぞれの人生の悲しみや苦しみを持っているということである。磯辺の場合は妻との死別による悲しみであり、美津子の場合は強い空虚感からくる寂しさの悲しみ、沼田は動物以外には決して打ち明けられない孤独という悲しみ、そして木口は戦争を経験したことからくる悲しみを、大津の場合は美津子に棄てられた

悲しみや、西欧のキリスト者から異端的扱いされる悲しみを抱えていると考えられる。

五人はそれぞれの人生の悲しみを背負いインドへやって行くわけだが、ツアー参加者一行は途中、「恵みをたれる女性」という意味のナクサル・バガヴァティ寺に行くことになる。地下に入ると、そこはうす暗く、ねっとりとした熱気のもつた石灰の臭いがする場所であり、この内部の壁には、ヒンズー教の女神像が彫られていた。それらの彫刻は気味が悪く、うす汚い彫刻であった。しかしそれらは、インドの全ての呻きや悲惨さ、そして恐怖を感じさせるものであった。インドの女神は烈しく死や血に酔う自然の動きのシンボルであったのだ。参加者たちは女神という言葉から、優しさや「母なるもの」を期待していたが、それらは全く感じる事ができなかった。しかし、最後に現れたチャームンダーという女神像だけは別であった。ツアー添乗員の江波はチャームンダーの説明を次のようにしている。

チャームンダーは墓場に住んでいます。だから彼女の足もとには鳥に啄まれたり、ジャツカルに食べられている人間の死体があるでしょう…

(中略)

彼女の乳房はもう老婆のように萎えびています。でもその萎えびた乳房から乳を出して、並んでいる子供たちに与えています。彼女の右足はハンセン氏病のため、ただれてい

るのがわかりますか。腹部も飢えてへこみにへこみ、しかもそこに蠍が噛みついていてでしょう。彼女はそんな病苦や痛みを耐えながらも、萎えびた乳房から人間に乳を与えているのです。四七

このチャームンダー像は、自ら人間と同じように苦しみながらも、人間に愛を与えている。この姿を見た時、参加者たちは何か感じるものがあつたようである。木口は「気に入ったね」と実感のこもつた声で述べ、続けて「私はね、ビルマ戦線で死ぬ思いをしたが、この痩せこけた像を見ると、雨のなか死んでいった兵隊を思い出す。あの戦争は……辛かった。そして兵隊の姿は……みな、こんなだった」^{四八}と語り、死線を共にした兵隊たちとこのチャームンダー像が重なつたことで、この女神も共に苦しんでいるのだという思いを抱いたことを打ち明けている。同様に江波はチャームンダーの苦しみについて次のように説明している。

彼女は……印度人の苦しみをすべて表しているんです。長い間、印度人が味わわねばならなかつた病苦や死や飢えがこの像に出ています。長い間、彼等が苦しんできたすべての病気にこの女神はかかっています。ユブラや蠍の毒にも耐えています。それなのに彼女は……喘ぎながら、萎えびた乳房で乳を人間に与えている。四九

チャームンダーは第二章で述べた共苦者として、人々の苦しみを共に苦しんでいる。それだけではなく、共に苦しみながらも乳を与えずにはいられないのである。この像を見た参加者たちは、チャームンダーの苦しみに自らの苦しみを重ね、連帯感を感じたのではないだろうか。チャームンダーのような共苦者としての同伴者は、遠藤の作品において至上の愛の行為として描き出されている。^{五〇}この女神には、まさに遠藤が思い描いた共苦者としての「母なるもの」が投影されていると考えられる。

ツアー参加者は次に、インドの人々やチャームンダー、そして自らの悲しさや苦しみを胸にガンジス河を指す。ガンジス河はヒンズー教徒にとつて、聖にして母なる河といわれており、ここでは皆争つて河に身をひたし、沐浴をするのである。それは「この河に入れば、それまでの罪はすべて流され、次の世界はよき境遇に生まれることが出来る」^{五一}とヒンズー教徒は信じているからである。

ツアー中に、インドの女性首相であるインディラ・ガンジーが暗殺される事件が起こる。彼女はインドの母と呼ばれている人物であり、町の青年に「印度のさまざまな宗教さまざまな民族の、対立や矛盾が彼女の女性としての優しさと強さによつて支えられています」^{五二}と言わせるほど、インドの国民的支持が強かつた人物である。そんな彼女であつても町中に溢れている苦しむ人々と同様に、死ぬと焼かれて灰になりに同じガンジス河に流される。母なる河は立場など関係なく、

それらを包み込むのである。母なる河はこの小説で、全ての存在を包み込んでくれる「母なるもの」として描かれている。それはヒンズー教徒に限らず、全ての人々に対してであり、生ける者も死せる者も関係なく包み込む深い河なのである。この作品の終盤に「河に來る者の一人一人がそれぞれに蠅に刺され、コブラに噛まれた女神チャームンダーの過去を持っている」^{五三}という一節がある。登場人物にも、それぞれに蠅に刺されたような人生の悲しさや苦しみがある。しかし母なる河は彼等の悲しみも同様に包み込み流れていくのであった。

結

本論文では、作家・遠藤周作が自分に合わない洋服と例えた西欧のキリスト教を、自身に合う和服に仕立て直そうとした点に着目しながら、彼の宗教観のキーワードである「母なるもの」が、彼の集大成ともいえる『深い河』^{ディープ・リバー}において、どのように現れているのかという点について論じてきた。そうすることにより、彼が最終的に辿り着いた自身に合うキリスト教とは、どのようなものか明らかになるのではないかと考えたからである。

第一章では、遠藤のキリスト教との関わりについて着目し

ながら、彼の生い立ちを振り返った。遠藤は中学生の頃、母親の影響により無自覚な洗礼を受けることになる。一時期は毎朝六時前に起き、教会のミサに通うという熱心な信仰を持つが、すぐに西欧に対し違和感を覚えるようになる。こうした違和感こそ、彼の生涯を貫く問題意識のきっかけとなったのである。その後、大学へと進学し昔から感じていた違和感をさらに深めて考え、校友会雑誌「上智」に、論文「形而上の神、宗教的神」を発表する。この論文では、日本人である自分にキリスト教の神がどのように実感出来るのかということが論じられている。その後、戦後初の留学生としてフランス留学をするも、留学中に日本人の自分と、西欧のキリスト教との距離感を痛感し、その距離感のあるキリスト教を身近なものにするという自分だけのテーマを背景に背負って小説家になることを決心するのである。

そのテーマの着地点として考えられるのが、遠藤の最後の長編小説である『深い河』である。この小説には「私の大部分が挿入されている」と彼自身も述べているように、幼い頃に大連で生活していた点や両親の不仲によって孤独な生活を送っていた点、また母親の影響で受洗している点や、西欧のキリスト教に違和感を覚えていた点など、第一章で記述したことが色濃く反映されているのである。

第二章では、遠藤を支え続けた同伴者としての「母なるもの」について論じた。まず「母なるもの」について考察する前に、松本滋の「父性的宗教」と「母性的宗教」に着目し、

遠藤の立場を明らかにした。その結果、遠藤は西欧のキリスト教はあまりに「父性的宗教」であるとし、日本人に合うのは「母性的宗教」であるとした。そして遠藤自身もまた、「母性的宗教」により親近感を示していた。

次に、この遠藤の立場を踏まえ、「母性的宗教」をさらに深めた「母なるもの」について考察をした。そこでは遠藤にとつての「母なるもの」の一つである聖母マリアを取り上げた。遠藤の人生では、困ったり苦しんだりした時は、無条件な愛で包み慰めてくれる聖母マリアに祈りを捧げていた。それは日本人である遠藤が、父性的な罰や厳しい導きを求めたのではなく、母性的な無条件の愛を求めたからだと考えられる。そのような遠藤にとつての「母なるもの」は、共にということが強調されており、ただ苦しみを引き受けてくれるだけではなく、苦しみを引き受けながらも、人間と共に苦しむという「母なるもの」の存在が大切だとされている。つまり、遠藤にとつての「母なるもの」は共苦者としての同伴者という位置付けができると考えられる。

第三章では、これまで論じてきた「母なるもの」が『深い河』において、どのように現れているのか考察した。この小説は、主に五人の主人公がそれぞれの思いを胸にインドでの旅路を共にするという話である。この五人に共通していることは、遠藤によると「失われた愛を求めて」彷徨うということであるが、五人それぞれが人生の悲しみや苦しみを背負っているという共通点もある。そんな中、ツアー参加者達はチ

ヤームンダーというヒンズー教の女神像と出会う。この像には長い間、インド人が味わわねばならなかった、苦しみの全てが表れている。その姿は西欧の聖母マリアのような清純でも優雅でもないが、人間の全ての苦しみと共に苦しみ、さらに、そのような状況でも萎えびた乳房で人間に乳を与えているのである。その姿はまさに遠藤の思い描いた共苦者としての「母なるもの」の現れだと考えられる。

次に、ヒンズー教徒から聖にして母なる河と言われているガンジス河について考察した。このガンジス河はヒンズー教徒の沐浴の場であるだけではなく、この小説では宗教に関わらず、全ての人間を包み込む存在として描かれている。それは死せる者も生きる者も関係なく、立場も関係ない、全ての存在を包み込んでくれる母なる河であった。

私はこの研究を踏まえ、遠藤の目指した自身に合うキリスト教とはどのようなものを考察した。遠藤は西欧のキリスト教が自分に合わない理由の一つとして、「父性的宗教」と「母性的宗教」を挙げている。それはこれまで論じてきたような理由からであり、彼自身、神に対しては父性的な厳しい戒律などを求めたのではなく、無条件的に苦しい時は側にいてくれるという、母性的な「母なるもの」としての存在を求めていたと考えられる。昔から違和感を抱いていた西欧のキリスト教に対しては、『深い河』で神父として登場する大津に「僕はヨーロッパの基督教を信じているんじやありません」と語らせており、それは遠藤自身の思想が投影されたも

のだと考えられる。また同小説では、神は存在というより働きであると述べており、^五その働きはキリスト教徒に限ったものではなく、すべての人に働いていると書かれている。そうしたうえで、遠藤は天津のように語らせている。

神は色々な顔を持つておられる。ヨーロッパの教会やチャペルだけではなく、ユダヤ教徒にも仏教の信徒のなかにもヒンズー教の信者にも神はおられると思います。^五

この一節はまさに「母なるもの」としての、無条件的な愛の現れだと考えられる。

遠藤は『深い河』において、神のことを「玉ねぎ」という特徴的な言葉に置き換えて話を進めている。そこには「神は存在ではなく働きだから呼び方は何だっつていい」、「日本人にとってキリスト教徒が使う神という言葉には馴染みがなく、その言葉で神を実感することは難しい。それだったら、愛でもぬくもりでも、玉ねぎだっつて何だっつていい」という考えが込められている。そして、その玉ねぎを用いて天津は次のように語っている。

ガンジス河を見るたび、ぼくは玉ねぎを考えます。ガンジス河は指の腐った手を差し出す物乞いの女も殺されたガンジー首相も同じように拒まず一人一人の灰をのみこんで流れていきます。玉ねぎという愛の河はどんな醜い人間も

どんなよこれた人間もすべて拒まず受け入れて流れます
^五

この一節にも、全てを無条件的に包み込む「母なるもの」の働きが現れている。またここでは、キリスト教の神やヒンズー教の神などの特定の神について語られているのではなく、それら全ての神を超克した玉ねぎとしての神が描かれている。遠藤は一九九一年九月五日の日記で、宗教哲学者であるジョン・ヒックの著作にふれ、宗教多元主義という考え方に衝撃を受け圧倒されたとき残している。^五 『深い河』において、この宗教多元主義の影響を受けているのは明らかである。それは神父である天津に、マハートマ・ガンジーの語録集に書かれている、「さまざまな宗教があるが、それらはみな同一の地点に集い通ずるさまざまな道である。同じ目的地に到達する限り、我々がそれぞれ異った道をたどろうとかまわないではないか」^五 という一文を読ませたということからもわかる。

私はこの考え方こそ、遠藤が西欧のキリスト教を日本人に合うものにしたようにとした過程で辿り着いたものだと考える。遠藤にとつての神とは、キリスト教の神という枠を超克したあらゆる存在に働く神なのである。『深い河』においては、それはキリスト教や仏教、ヒンズー教などの神や仏を超克した玉ねぎだったのである。

注

- 一 遠藤周作「合わない洋服 何のために小説を書くのか」『遠藤周作 文学論集 宗教篇』講談社、二〇〇九年、三〇四頁。
- 二 同上、三〇四頁。
- 三 遠藤周作『遠藤周作全日記【下巻】一九六二～一九九三』河出書房新社、二〇一八年、四〇五頁。新井信『遠藤周作のすべて』文藝春秋、一九九八年、三六二頁。
- 四 『深い河』での登場人物。
- 五 遠藤周作『人生の同伴者』春秋社、一九九一年、一五頁。
- 六 同上、一五頁。遠藤周作「年譜・著作目録」『遠藤周作文学全集一五』新潮社、二〇〇〇年、三三二～三三三頁。新井信『遠藤周作のすべて』、三六二頁。
- 七 遠藤周作『私にとって神とは』光文社、一九八八年、七頁。
- 八 同上。七頁。
- 九 遠藤周作「合わない洋服 何のために小説を書くのか」、『遠藤周作文学全集一二』、二〇〇〇年、三九五頁。
- 一〇 遠藤周作『私にとって神とは』、五九頁。
- 二 遠藤周作『遠藤周作全日記【下巻】一九六二～一九九三』、四〇五～四〇六頁。遠藤周作「年譜・著作目録」、『遠藤周作文学全集一五』、三三二頁。新井信『遠藤周作のすべて』、三六二頁。遠藤周作「合わない洋服 何のために小説を書くのか」『遠藤周作文学全集一二』、三九五頁。遠藤周作『私にとって神とは』、五九頁。
- 三 遠藤周作『人生の同伴者』、四二頁。
- 三 遠藤周作『遠藤周作全日記【下巻】一九六二～一九九三』、四〇五～四〇六頁。遠藤周作「年譜・著作目録」『遠藤周作文学全集一五』、三三二～三三三頁。新井信『遠藤周作のすべて』、三六二頁。
- 四 遠藤周作『遠藤周作文学全集一四』新潮社、二〇〇〇年、四七七頁。
- 五 遠藤周作『遠藤周作全日記【下巻】一九六二～一九九三』、四〇六頁。遠藤周作「年譜・著作目録」『遠藤周作文学全集一五』、三三二～三三三頁。新井信『遠藤周作のすべて』、三六二頁。
- 三六三頁。遠藤周作「私の履歴書」『遠藤周作文学全集一四』、二三八頁。久松健一「遠藤周作の秘密（下）」、『明治大学教養論集』、通巻四〇八号、二〇〇六年三月、八八頁。
- 二六 遠藤周作『遠藤周作全日記【下巻】一九六二～一九九三』、

四〇六～四〇七頁。遠藤周作「年譜・著作目録」『遠藤周作文学全集一五』、三三四～三三五頁。新井信『遠藤周作のすべて』、三六三頁。遠藤周作「私の履歴書」『遠藤周作文学全集一四』、二三九頁。

二七 遠藤周作『人生の同伴者』、六一頁。

二八 遠藤周作『遠藤周作全日記【下巻】一九六二～一九九三』、四〇七頁。遠藤周作「年譜・著作目録」『遠藤周作文学全集一五』、三三五～三三六頁。新井信『遠藤周作のすべて』、三六三頁。遠藤周作「私の履歴書」『遠藤周作文学全集一四』、二四四頁、二四六頁。遠藤周作『人生の同伴者』、六一～六二頁。

二九 遠藤周作「カトリック作家の問題」『遠藤周作文学全集一四』、二四頁。

三〇 遠藤周作『遠藤周作文学全集一〇』新潮社、二〇〇〇年、二四〇頁。

三一 遠藤周作「私の履歴書」、『遠藤周作文学全集一四』、二四八頁。

三二 遠藤周作『遠藤周作全日記【上巻】』、河出書房新社、二〇一八年、一四九～一五〇年。

三三 遠藤周作『遠藤周作全日記【下巻】一九六二～一九九三』、

四〇八～四一〇頁。遠藤周作「年譜・著作目録」『遠藤周作文学全集一五』、三三七～三三九頁。新井信『遠藤周作のすべて』、三六四～三六五頁。

二四 遠藤周作『人生の同伴者』、一〇六頁。

二五 遠藤周作『遠藤周作全日記【下巻】一九六二～一九九三』、四一〇頁。遠藤周作「年譜・著作目録」『遠藤周作文学全集一五』、三三九～三四〇頁。

新井信『遠藤周作のすべて』、三六五～三六六頁。

二六 遠藤周作『私にとって神とは』、一二三頁。遠藤周作「神々と神と」『遠藤周作文学全集一二』、一一頁。

二七 同上、一四～一五頁。

二八 松本滋『父性的宗教・母性的宗教』東京大学出版会、一九八七年、二二三頁。

二九 同上、二〇～二二頁。

三〇 河合隼雄『母性社会日本の病理』講談社、一九九七年、一九～二四。

三一 遠藤周作『遠藤周作全日記【下巻】一九六二～一九九三』河出書房新社、二〇一八年、二四五頁。

三二 井筒俊彦『井筒俊彦全集 第八巻 意味の深みへ』、慶應義塾大学出版会、二〇一四年、三四一頁。

- 三三 遠藤周作『遠藤周作全日記【上巻】』、八九頁。
 三四 同上、四六三頁。
 三五 若松英輔『日本人にとってキリスト教とは何か 遠藤周作『深い河』から考える』NHK出版、二〇二二年、一八三頁。
 三六 遠藤周作『遠藤周作文学全集四』新潮社、一九九九年、三五二頁。
 三七 同上、三五二頁。
 三八 若松英輔『日本人にとってキリスト教とは何か 遠藤周作『深い河』から考える』、一四頁。
 三九 同上、三三二頁。
 四〇 同上、二七頁。
 四一 遠藤周作『遠藤周作文学全集四』、三五二頁。
 四二 遠藤周作『深い河』講談社、一九九六年、二六頁。
 四三 同上、一〇六頁。
 四四 同上、一九八頁。
 四五 同上、一〇五頁。
 四六 同上、一〇七頁。
 四七 同上、二二五頁。
 四八 同上、二二五頁。
 四九 同上、二二六頁。
 五〇 同上、一八六頁。
 五一 遠藤周作『深い河』、三二八頁。
 五二 同上、二七〇頁。
 五三 同上、三一九頁。
 五四 同上、一〇五頁。
 五五 同上、一〇四頁。
 五六 同上、一九六頁。
 五七 同上、三〇二〜三〇三頁。
 五八 遠藤周作『遠藤周作全日記【下巻】一九六二〜一九九三』、三二五〜三二六頁。
 五九 遠藤周作『深い河』、三二〇頁。

参考文献

- 遠藤周作『深い河』ディープ・リバー 講談社、一九九六年。
- 遠藤周作『遠藤周作全日記 【上巻】』河出書房新社、二〇一八年。
- 遠藤周作『遠藤周作全日記【下巻】』一九六二〜一九九三』河出書房新社、二〇一八年。
- 遠藤周作『遠藤周作文学全集四』新潮社、一九九九年。
- 遠藤周作『遠藤周作文学全集一〇』新潮社、二〇〇〇年。
- 遠藤周作『遠藤周作文学全集一二』新潮社、二〇〇〇年。
- 遠藤周作『遠藤周作文学全集一四』新潮社、二〇〇〇年。
- 遠藤周作『遠藤周作文学全集一五』新潮社、二〇〇〇年。
- 遠藤周作『遠藤周作 文学論集 宗教篇』講談社、二〇〇九年。
- 遠藤周作『人生の同伴者』春秋社、一九九一年。
- 遠藤周作『私にとって神とは』光文社、一九八八年。
- 若松英輔『日本人にとってキリスト教とは何か 遠藤周作『深い河』から考える』NHK出版、二〇二二年。
- 井筒俊彦『井筒俊彦全集 第八巻 意味の深みへ』慶應義塾大学出版会、二〇二四年。
- 久松健一『遠藤周作の秘密(下)』、『明治大学教養論集』、通巻四〇八号、二〇〇六年。
- 新井信『遠藤周作のすべて』文藝春秋、一九九八年。
- 河合隼雄『母性社会日本の病理』講談社、一九九七年。
- 松本滋『父性的宗教・母性的宗教』東京大学出版会、一九八七年。

天理教における「いんねん」と夫婦観

脇 晴香

コメント

荒川 善廣

本論文は、「夫婦は、前生のいんねんによって結ばれる」という言葉を、「おふでさき」および「おさしづ」に基づいて跡付けつつ論じたものであり、上手くまとめていると思う。まず「いんねん」について、人間には根源的で普遍的な存在根拠を意味する「元のいんねん」がある。また、個人のいんねんにしても、善いんねんもあれば悪いいんねんもあるが、いずれにせよ、個人のいんねんは「元のいんねん」を土台にして成り立っている。その上で、人間の一生は「いんねん」を背負いつつ生まれ、そして自らの「いんねん」をつくっていく日々であると述べている。

夫婦については、それぞれの前生の「いんねん」と今生における心遣いに応じて最も相応しい人と結ばれると言われて

いる。裏を返せば、人間の一生はすべて前生の「いんねん」によって定まるわけではなく、自由を許された心をどのよう
に遣うかが大事であるということを意味する。また、「夫婦
と成るも、親子と成るもいんねん」ということは、それぞ
れの「前生」は、狭い意味ではなく、「前々生」や幾代も前の
「過去生」を含む、広い意味での「前生」と解すべきであ
らう。このようなことは、文献の行間を読み、思考をめぐらす
ことで導けるかもしれない。

夫婦と成る「いんねん」という場合、善いんねんも悪い
いんねんも両方含むと考えられるが、「たんのうは前生いん
ねんのさんげ」と言われるさいの「いんねん」は、「ほこり」
が重なったゆえの悪いいんねんを指している。論文では、夫
婦の心遣いについて、夫婦は互いが鏡のようなものであるか
ら、互いの姿を見て自己の「いんねん」を自覚し、「前生の
いんねん」をさんげして夫婦揃って心を治めることが肝心で
ある、と述べている。

今後は、「いんねん」の教えを、夫婦に限定せずに、より
掘り下げて考察することが望まれる。

序

因縁という言葉を知ると、どのような印象を持つだろうか。天理教を信仰していない複数の友人に問いかけたところ、やはり一番出てきたのは「暗い」「怖い」「悪いもの」などネガティブな印象を持っている者が多かった。また中には「後々面倒くさいことになりそうと感じる」と言う者もいる。かく言う私もこの言葉を聞くと、思わず身構えてしまうような、どこか後ろめたいような、心が重くなるイメージを持っているのは否めない。しかし、人間は、さまざまな人間関係の中で生きており、それは、家族であったり、友人であったり、学校の教師や生徒、会社の上司や部下、あるいは隣人、または教会であったりと、私たちが社会生活を営む上で、必要な関係である。中でも、夫婦、親子、兄弟姉妹というのは、誰にとっても一番身近な存在であるが、特に、お道の教えの上で、もつとも基本的な人間関係は、夫婦であるとされている。(一)

夫婦が、生涯仲睦まじく過ごせるのが何より理想であるが、これが中々難しく、世間にはさまざまな事情や理由から離婚する夫婦も少なくない。このことは「夫婦仲良く」がいかに難しいかを如実に物語っている。(二)

しかし、教義の源泉となる「おさしづ」には、

夫婦の中と言うてある。夫婦皆いんねんを以て夫婦という。
(明治24・11・21)

これ夫婦いんねん見て暮らす、見て通るいんねん、
よう聞き取れ。 (明治24・3・22)

と教えられている。(三)

私は「いんねん」の教理に興味を持ち、その上で、天理教における夫婦観を整理したいと考えた。そこで、本論文では、特に個人の「いんねん」に焦点を当て、さらに上記の問題意識から「おさしづ」を中心に、天理教における夫婦観について考察していきたいと考えている。

まず、始めに第一章においては、いんねんの教理を、原典や教典を用いて整理し、第二章では「おさしづ」における夫婦の「いんねん」にまつわるお言葉を纏め、掘り下げていきたい。そして、第三章では、前二章を踏まえた上で、夫婦とはどのような心づかいが大事なのかを、掘り下げて考察したい。最後に結論では、本論文において明らかになったことを纏めて、ここでの結びにしたい。

第一章 「いんねん」の教理解

因縁という言葉は、元来仏教の用語であるが、本教の教え

である「いんねん」は、漢字ではなく、かなで表されることが多い。これはこの言葉の一般的な用法と区別するためと言われる。だが、言葉のみで捉えると、漢字の因縁と何ら変わりはなく、おそらく、天理教においても、初期の信仰者たちの多くは、教祖が説かれる「いんねん」を、日常的な一般的な意味で聞き、あるいは仏教的な意味で解釈したに違いない。つまり、それは教祖が、「いんねん」という言葉で教えらるる真実を理解するより先に、その言葉を、一般的な意味で解釈してしまう事実を示している。(四)

序の冒頭で挙げた通り、「いんねん」という言葉は、ネガティブな意味を持っているように感じるが、決してそうではないのが本教の説くいんねんである。この章では、「いんねん」の教理を、原典や教典を用いて整理し、理解を深めていきたい。

第一節 「元のいんねん」と個人の「いんねん」

お道で説かれる教えでもっとも重要な点は、「元のいんねん」が明かされたことである。「元のいんねん」とは、この世の元初まりにおける、人間存在が創造された、根源的で普遍的な存在根拠を意味している。(五)

この世の元初まりは、どろ海であった。月日親神は、この混沌たる様を味気なく思召し、人間を造り、その陽気ぐら

しをするのを見て、ともに楽しもうと思いつかれた。(六)

根源的で真実の神である親神は、全くの「無」から人間世界を創造された。つまり、人間世界をはじめ、すべての存在は唯一なる親神の偉大なる守護の結果にほかならない。ちなみに、どろ海とは「無」を具現化したものと解釈できるが、どろ海の中に月日親神が存在したというよりも、むしろ、時間も空間も実は親神の守護が発動した結果、はじめて存在するものであるということを押さえておく必要がある。(七)

また、「おふでさき」に、

月日にわにんけんはじめかけたのわ

よふきゆさんがみたいゆへから(十四・25)

と記されているように、ここに人間創造の目的がはっきり示されている。「よふきゆさん」の遊山は、単なる見物とか遊びではなく、元々は仏教用語としての意味があり、「一点の曇りもない晴れ晴れとした心境になって、美しい景色を楽しみ、悠々自適に過すこと」(『日本国語大辞典』)を指している。(八)

つまり、月日親神は、人間が「陽気ぐらし」をするのを見て、ともに楽しみたいとの思召から人間世界を創造され、以来全人類全世界を守護し、さらにすべての人間に陽気ぐらしをさせようと、教祖を「やしろ」としてこの世に現れて救済

の道を教え、たすけをされている。この親神の思召と働きによつて人間世界の一切の現象は守護されているのである。それゆえ、この事情を「元のいんねん」と呼んで、根本的で普遍的な存在根拠として示されたのである。(九)

そして、人間は誰しもが「陽気ぐらし」の可能性を与えられているのであるが、だれもそれを完全には実現していない。ここで問題になるのが、人間一人ひとりの個人的な存在の根拠を説明する個人の「いんねん」である。「おさしづ」に、

人間身の内神のかしもの・かりもの、心一つ我が理。(明治22・3・3)

というお言葉があるように、人間の身体は月日親神のかしものであり、心は自分のものである。この人間に自由を許された心、心遣いというのが、個人の「いんねん」と密接な関係があり、大きく関わっているのである。

いんねんというは心の道、と言うたる。心の道と言うたるで。(明治40・4・8)

この「心の道」というたとえは、二重の意味を持っており、一つは人間一人ひとりの心が誕生から、ひいては創造のときからたどってきた道であり、その効果として、現在に現れてくる姿である。他の一つはその心がこれから先たどっていく

道を形成していく。要するに、「心の道」とは、心が現在現れてくる個人の「いんねん」の形成と、これから先の姿を形成していく機能の両方を表している。ここに、「いんねん」という教語に対して、多くの人が根強く感じる、運命、宿命、定め、つまり、「いんねん」なら仕方がないという一種の諦めを、心の力、心の自由を発揮してのり越えていく可能性を見いだすのである。また、「元のいんねん」をベースに個人の「いんねん」が成り立っており、人間の存在根拠である「いんねん」は、「元のいんねん」と個人の「いんねん」とが重なり合う、いわば二重構造をなしているのである。(十)

ところで、人間の心遣いが自己中心的に傾きやすい現状から推しはかつて、それぞれの「いんねん」を形成してきた心の道が「ほこり」に満ちていたことは明らかであり、心の「ほこり」はそれが積み重なると、その人の「いんねん」となり、一層「ほこり」を積もらせるのである。(十一) 個人の「いんねん」には、善い「いんねん」もあれば、悪い「いんねん」もある、と言われており、「おふでさき」及び「おさしづ」では、

よろづよにせかいのところみハたせど

あしきものハさらないぞや (一・52)

一れつにあしきとゆうてないけれど

一寸のほこりがついたゆへなり (一・53)

いんねんと言うても、白いんねんもある、悪いいんねんもある。(明治31・9・30)

世界にもどないんねんもある。善きいんねんもあれば、悪いいんねんもある。(明治28・7・22補遺)

と諭されている。また、先人はこう語る。

いんねんというは、前生ばかり、いんねんというやない。悪きばかりが、いんねんやない。この世でも、十五才よりこのかた、してきたことは、よきも、あしきも、皆いんねんとなる。(十二)

本教の教えにおける「いんねん」の語は、いずれも、「前生」や「悪しき」ばかりを意味しているわけではない。また必ずしも、運命、宿命、定めを意味しているでもない。したがって、仏教的あるいは日常的な意味での「因縁」と區別して、「いんねん」の意味を理解することが肝心である。(十三)

第二節 「おふでさき」における「いんねん」

三原典の一つである「おふでさき」の中には、「いんねん」という言葉を含むおうたが十三首ある。(十四)

きゝたくバたつねくるならゆてきかそ

よろづいさいのもとのいんねん (一・6)

このよふハあくしまじりであるからに

いんねんつける事ハいかんで (一・62)

せんしよのいんねんよせてしうごふする

これハまつだいかとをさまる (一・74)

二二の二の五つにはなしかけ

よろづいんねんみなときゝかす (三・147)

どのよふなところの人がでゝきても

みないんねんのものであるから (四・54)

にんけんをはじめだしたるやしきなり

そのいんねんであまくたりたで (四・55)

けふの日ハなにかめづらしはじめだし

よろづいんねんみなついてくる (四・60)

いんねんもをふくの人であるからに

とこにへだてハあるとをもうな (四・61)

月日より三十八ねんいぜんにて

あまくたりたる元がいんねん (七・1)

月日よりそのいんねんがあるゆへに

なにかいさいをはなしたいから (七・2)

この月日もとなるぢばや元なるの

いんねんあるでちうよぢさいを (八・47)

月日よりひきうけするとゆうのものな

もとのいんねんあるからの事 (十一・29)

いんねんもどふゆう事であるならば
にんけんはぢめもとのどふぐや (十一・30)

これらのおうたは、(イ)元のいんねんー根源的因果性、
(ロ)関連性ーかかわりあい(但しこの関連性は(イ)に基
づく) a 空間的・b 時間的、(ハ)必然悪ー過程的悪
の三つのカテゴリーに分類される。(二・62)(一・74)
(四・54)(四・61)以外の九首のおうたは、(イ)元の
いんねんー根源的因果性を示している。つまり、「おふでさ
き」は根源的な部分、「元のいんねん」を中心としたおうた
が連なっているため、個人の「いんねん」に関するおうたと
いうのは非常に少ないのである。
残りの四首は、次のように区別されている。

- a (ロ) 関連性ーかかわりあい
- a 空間的 (四・54) (四・61)
- b 時間的 (二・74)
- (ハ) 必然悪ー過程的悪 (一・62)

a 空間的関連性というのは、「見るも因縁聞くも因縁」また
は、「世上は鏡」などと言われるものであり、b 時間的関連
性というのは、「生まれかわり」ということよって示され
る前生・今生・来生の因縁、または、「古き因縁」と言われ
るものである。(十五)

また、(四・54) (四・61) のおうたは、次の
ような意味がある。

どのよふなところの人がでゝきても
みないんねんのものであるから (四・54)

たとえ、どんな所の人ややって来ても、「みないんねんの
ものである」、これは元のいんねんという意味でお使いに
なっている。元のいんねん、人間は皆、元のぢばで、親神
様によって宿し込まれた神の子、お互いは兄弟姉妹である。
皆、等しく元のいんねんによって繋がる者同士だから隔て
はない。(十六)

いんねんもをふくの人であるからに
とこにへだてハあるとをもうな (四・61)

よろづいんねんによって、皆ついてくると言っても、大勢
の人間であるから、どこかに隔てはあるだろうなどと思っ
てはならない。決してどこにも隔てはない。(十七)

この二首は一言で表すと、現世での人との出会いに関し
て説かれているおうたではないだろうか。私たち人間は皆
親神の子にして、一れつ兄弟姉妹であるため、誰一人とし
て差別してはならないのである。次に、b 時間的に区別さ

れている(一・74)のおうたの意味については、次のように解釈されている。

ぜんしよのいんねんよせてしうごふする
これハまつだいかとをさまる(一・74)

人間達は目の前のことばかりを考えて、いろいろと云うが、親神は前生からのいんねんある魂の者同士を元の屋敷に寄せて、夫婦と守護するのだ。それでこそ、末代までしつかりと治まる。内々も治まり、またそれが世界の治まりともなってくるということである。(十八)

この(一・74)のおうたは、本来、教祖のご長男秀司様と奥様のまつゑ様の場合のことで、一般の場合とは少し違うらしい。つまり、あくまで、元の道具衆を夫婦として引き寄せ、たすけ一条の上に働きをしてもらいたいとの意味である。一般の場合には、前生の「いんねん」と今生の通り方との両方によって組み合わされると言うべきなのである。そこで、一般の場合には、(一・62)のおうたが重要な意味を持つ。このおうたは、次のように解釈されている。

このよふハあくしまじりであるからに
いんねんつける事ハいかんで(一・62)

この世というものは、とかく悪事混じり、悪い事に染まりやすい。いんねんと言葉は、「おふでさき」に何度も出てくるが、悪い意味で使っておられるのはこの一例だけと言える。(一・62)のおうたは、必然悪―過程的悪と記されている。簡単に言うと、「因縁をつける(喧嘩とか文句)―ということである。この世はとかく悪事に染まりやすいからして、悪いんねんを付けないようにと、お戒めになっているのである。(十九)

人間は、本来的には善ではあるが、存在的には必然的に悪を背負うものである。というのは、人間は心の自由を許されているので、知らず識らずの中に、我身勝手の道を通ってほこりを積むからである。それが積もって悪因縁となり、親神が望まれた「陽氣ぐらし」には程遠い道を進んでしまうのである。(二十)

『稿本天理教教祖伝逸話篇』「三一 天の定規」では次のような御逸話が残されている。

教祖は、ある日飯降伊蔵に、

「伊蔵さん、山から木を一本切つて来て、真つ直ぐな柱を作ってみて下され。」

と、仰せになった。伊蔵は、早速、山から一本の木を切つて来て、真つ直ぐな柱を一本作つた。すると、教祖は、「伊蔵さん、一度定規にあててみて下され。」

と、仰せられ、更に続いて、

「隙がありませんか。」

と、仰せられた。伊蔵が定規にあててみると、果たして隙がある。そこで、「少し隙がございます。」とお答えすると、教祖は、

「その通り、世界の人が皆、真つ直ぐやと思われている事も、天の定規にあてたら、皆、狂いがありますのやで。」
と、お教え下された。(二二)

つまり、自分では、悪い事は一つもしていないと思うかも知れないが、神からすると、皆悪がある、つまり、ほこりの心を使わない人間は決していない。それを戒めているのが、(一・62)のおうたなのである。

このように、「おふでさき」の中で説かれている「いんねん」に関するおうた、特に(一・62)(四・54)(四・61)のおうたは、日々の通り方、心の使い方、諭されているように受け取れるのである。

こうして、「陽気ぐらし」を実現するために各々の「いんねん」の自覚と少しでも悪い部分を切つていかなければならないのだが、これがなかなか難しい。しかし、私たちがこの世に生を受けて得たこの心は、いんねんを背負った心である。過去、前世に於て、自分たちの心に日々蒔いて行くところの、種が芽生えて来たものであり、善いことも、悪しきことも、凡てみな「いんねん」のいたす所である。つまり、人間の一

生というのは、「いんねん」を背負いつつ生まれた上に、また自らの「いんねん」をつくつていく日々であるということとを、よく理解しておく必要がある。(二二)

第二章 夫婦皆「いんねん」以て夫婦という

第一章を踏まえた上で、前生の「いんねん」によって一つになること、それが夫婦であり、結婚である。哲学博士である堀内みどりによると、夫婦は、「兄弟の仲の兄弟」(明治28・7・23)と諭される他に、以下のような基本的構造を持つ関係であることが知られている。(二三)

a、「元の理」に基づいた関係である↓「陽気ぐらし」

b、「この世始まりだし」の関係である↓「男と女」(生命の継続)

c、「いんねん」に基づく男女の関係である↓「二つ一つ」という「たんのう」

d、「心」と「心」が寄り合い、「治まる」「生涯の理・末代の理」である

↓救いの原理
e、家族の始まりとなる↓社会の基盤

まず第一に、夫婦には「陽気ぐらし」をさせてやりたいと

の親神の深い親心が込められていることを理解するのが肝心である。(二四)

本章では、上記の a、b、そして c の夫婦にまつわる「いんねん」について、主に「おさしづ」を用いて考察していきたい。

第一節 夫婦の理

本教の教えにおいて夫婦という存在は、人間関係の根源として重要な意味を持つて

いる。それは、親神がこの世の元初まりにおいて、夫婦を人間創造の基本とされたか

らである。(二五)「みかぐらうた」には、次のように説かれている。

このよのぢいとてんとをかたどりて ふうふをこしらへきたるでな

これハこのよのはじめだし (第二節)

この世界の大地と天を象つて、夫婦を拵え今日に至つた、と言われており、人間世界創め出しの真実の話だと続けられる。(二六)

第一章の第一節で述べた通り、親神は、人間が「陽気ぐらし」をするのを見て、ともに楽しみたいとの思召から人間を

創造された。『天理教教典』第三章「元の理」から人間創造の経緯を、簡潔にまとめると、親神は、どろ海中にいる、沢山のどちよの中から、「うを」と「み」の一すじ心なるを見澄ました上、これを夫婦の雛型にしようと引き寄せられた。続いて、勢い強く突つ張る性質の「しやち」(男一の道具及び骨つぱりの道具)を「うを」に仕込み、男雛型(いざなぎのみこと)とし、ふん張り強く倒れない性質の「かめ」(女一の道具及び皮つなぎの道具)を「み」に仕込んで女雛型(いざなみのみこと)とされ、男女の原型を造られたのである。雛型と道具が全て定まった後、親神は、どろ海中のどちよを皆食べてその心根を味わい、これを人間のたねとされた。そして、月様(くにとこたちのみこと)はいざなぎのみことの体内に、日様(をもたりのみこと)はいざなみのみことの体内に入り込み、人間創造の守護を教えられた。以上のことから、天に象られた夫は「月様の理」、地に象られた妻は「日様の理」を受けており、月様と日様がそれぞれ「いざなぎのみこと」と「いざなみのみこと」の体内に入り込まれたということは、夫婦は「月日の理」を受けているということである。「夫婦の理」という言葉は、このことを指していると考えることができるのである。(二七)

また、本教の教えでは、「二つ一つが天の理」と教えられているが、それは相対するものが二つでありながら、そのまま一つであるという存在の関係構造を示している。すなわち、月様と日様、水と火、男雛型と女雛型という、相反する性質

をもつ二つが一つになる、「二つ一つ」の守護によつて夫婦、
そして人間世界が成り立っていると理解できる。(二八)
また、

ふたりのこゝろをさめいよ

なにかのことをもあらはれる (四下り目 二ツ)

ふうふそろうてひのきしん

これがだいゝちものだねや (十一下り目 二ツ)

とのおうたがあるように、まずは二人の心を治めることが、
夫婦の根幹になってくる。そのあとに続く「なにかのことが、
もあらはれる」には、神を目標に、夫婦の心を治めて通れば、
今は辛くて苦しくとも、必ず先は喜びに満ち溢れ、勇んだ姿
になってくる。反対に、心がお互いに治まっていないバラバ
ラな通り方では、それ相応の道が待っていると諭されている。

(二九)

そして、夫婦が心を揃えて通ることが一番の「ものだね(物
種)」「であると教えて下さっている。「ものだね」という言
葉を聞いて思いつくのは、「おふでさき」号外の、「ものだ
ねのおうた」³首である。

にち／＼に心つくしたものだねを

神がたしかにうけとりている

しんぢつに神のうけとるものだねわ

いつになりてもくさるめわなし
たん／＼とこのものだねがはへたなら
これまつだいのこふきなるぞや

「おふでさき」号外

「ものだね」というのは、必要なものが必要な時に、必要
な分だけお与え頂ける種だとされており、この「ものだね」
による守護こそ、一番のご守護であると教えられている。す
なわち、夫婦の心の治め方一つで、二人の真実があれば、た
とえどんなに難儀な道でも、親神にご守護頂けるのである。
(三十)

第二節 「おさしづ」における「いんねん」と夫婦

さて、「おふでさき」、「みかぐらうた」に続いて、「お
さしづ」における夫婦観について理解をしていきたい。本教
の教えにおいて、夫婦と「いんねん」は切っても切れない関
係である。「おさしづ」では、夫婦と「いんねん」について
次のように諭されている。

縁談というは、そう難しいようなものやない。一人があ
れと言うた処が行くものやない。あれとこれと寄り合うが
いんねん、いんねんなら両方から寄り合うてこうと言う。
いんねんがありやこそ、これまで縁談一条皆治まつている。

(明治27・9・22)

夫婦の中と言うてある。夫婦皆いんねんを以て夫婦とい
う。(明治24・11・21)

皆夫婦と成るもいんねん、親子と成るもいんねん。どう
でもこうでもいんねん無くして成らるものやない。(補
遺34・3・26)

皆それ／＼いんねん皆引き出す、呼び出す、寄せる。何
程寄りたい、来たいと言つても出来るものではない。(明
治26・7・8)

成るもいんねん、成らんもいんねん。何ほしようと思
うても成らせん、又、しようまいと思つても成りてくるが、
これいんねん。よう聞き分け。(明治27・9・24)

縁談というは、よう聞き分けにやならん。夫婦二人は言
うまでもない。親々言うまで。夫婦一代一つ心、その心理
に、どうでもこうでも二人、二人の理に心が治める
なら、何時なりと許し置くで。(補遺33・9・26)

人間は皆生まれた時から悪いことをしようと思つて生きて
いる訳ではないだろう。しかし、悪いことはしたくないと思
つても、そう成つてきてしまう。それが「いんねん」である。

「いんねん」は、無意識の魂にはりついた心の癖なので、そ
う簡単に変わったたり、治るものではない。そうした「いんね
ん」に引き寄せられた者同士が、夫婦や親子になっている。
結ばれ方は皆様々であると思うが、本人同士であろうと、周

囲の配慮であろうと、双方が寄り合うから、成り立ち、その
寄り合いこそ「いんねん」であるとされている。(三二)
「おさしづ」に、

夫婦の中と言つてある。夫婦皆いんねんを以て夫婦とい
う。(明治24・11・21)

とあるように、夫婦は、前生の「いんねん」によつて結ばれ
ると見る必要がある。つまり、夫婦は皆「いんねん」があつ
て夫婦となつていたのであつて、この世に、「いんねん」無
しに夫婦になつてゐる者はいない、ということになる。ただ、

いんねんというは通らにやならん。いんねん寄せてある。
悪きいんねん寄せてない。悪きいんねんの者は居らゝせん。
(明治24・5・20)

とも諭されており、それぞれの前生の「いんねん」と今生に
おける心遣いに応じて、最も相応しい人と結ばれているとい
うことをしっかりと自覚することが大切である。(三三)

第三章 本教における夫婦の在り方

第一章、第二章で、「いんねん」の教理、及び「いんね

ん」における夫婦観をまとめてきた。夫婦は「いんねん」が強く引き寄せられた者同士が結ばれ、一つの形に治まる。しかし、「いんねん」には皆それぞれ良い「いんねん」と悪しき「いんねん」がある。良い「いんねん」はともかく、悪しき「いんねん」は一刻も早く切る必要がある。いわゆる「いんねん」の納消と呼ばれるものであるが、「いんねん」を納消するというのは、突然言われて、すぐに消せるほど簡単なものではない。前生からともにある「いんねん」は、自分が生きている年数よりも、はるか昔から続いているものであるからして、まず一代で全てを断ち切ろうとするのは不可能である。少しでも悪い「いんねん」を断ちたいと思うならば、「いんねん」を自覚することから始まるのである。「おさしづ」に、

夫婦の中、人を見るやない、聞くやない。もうこれからという理を改めるなら、生涯という。(明治24・11・8)

というお言葉があるが、この教えは「いんねんの自覚」という教理として展開するもので重要な「おさしづ」となるとされる。(三三)

この章では、「おさしづ」における夫婦の在り方について自身の見解とともに述べていきたい。

第一節 「おさしづ」からみる「いんねん」と「たんのう」

前生どういいういんねんやらと言う。為すいんねん聞き分け。一つ話する。一時似て掛かる事情、何したんやらと思わず、内々夫婦中という、一時あたゑ。あたゑ無きという。それは何にも思う事要らん。夫婦あたゑ無きいんねん。先々いんねん、先々治め方、これ一つ確かにもたにやららん。(明治28・3・11)

これ夫婦いんねん見て暮らす、見て通るいんねん、よう聞き取れ。 (明治24・3・22)

成ると成らんと聞き分けて、ほんに世上なあ、いつ／＼なあ、その理夫婦中治めるなら前生いんねんのさんげえと諭し置こう。(明治32・9・2)

夫婦は男性と女性から成るように、もつとも対照的な心を持つ二人の関係である。(三四) これらの「おさしづ」からみるに、夫婦は、お互いの「いんねん(心の道)(癖・性分)」を見ながら通ることによって、夫婦の中が治まるならば、「前生いんねんのさんげ」となる、と諭されている。(三五) この「前生いんねんのさんげ」として鍵となるのが「たんのう」なのである。

皆同じ人間、かりもの・かしもの中、どんな理どんな事情も見る。又聞くやろ。これからたんのう。たんのうはいんねんのさんげえである。これよく伝えてくれ。

事情は、皆それ／＼心得事情に、一つ論し置こう。(明治29・10・10)

人間というものは前生いんねんという理を持ち来てある。いんねんの理は世上の理を見てさんげ。世上の理に難儀の難儀、不自由の不自由という理を皆映してある。……世上見てたんのうと心定めば、たんのうはいんねんのさんげである。随分ならんでない。(明治24・1月)

出けんたんのうするは、前生のいんねんのさんげ。前生いんねんは、これよりさんげ無いで。(明治32・3・23)

たんのう中、ならん中たんのうするは誠、誠受け取る。ならんたんのうは出けやせん。なれど一つ、ならん一つの理は、多くの中見分けてたんのう。ならん中たんのうするは、前生のさんげ／＼と言う。ようこれ聞き分け。(明治30・10・18)

夫婦の中たんのう一つの理、互い／＼とも言う。さあこれより一つしつかり治めるなら、いかなる事も皆んなこれ思うように事情成つて来るという。この一つの理は将来の心、さあこれよりと言えは、何にも案じる事は無いで。夫婦の中の事情、世上という、世界という理が映ればどうもならん。(明治30・7・19)

成ろと言うて成るものやない。又成ろまいと言うても成りて来るいんねん順序は世上へ諭す。又内々夫婦中へ治まってある。治まってあれば、よく聞き分け。……皆世上中という。昼に有つて晩に無い。一日有つて二日無い。世上

多く心に取り寄せてくれにやなるまい。事情有つてたんのうの理治まらん。なれど、世界の理を見てたんのう。成ると成らんと聞き分けて、ほんに世上なあ、いつ／＼なあ、その理夫婦中治めるなら前生いんねんのさんげえと諭し置こう。ほんに今まで知らなんだなあ。世上の皆難を見てほんになあと治めてくれ。(明治32・9・3)

「たんのう」の原義は、「足りている」つまり、満足した心の状態を表している。苦しい状況の中で「たんのう」する、というのは単に歯を食いしばって我慢したり、泣く泣く辛抱することではなく、今起きている物事に対して前向きに受け止め、感謝し、心を励まして踏ん張ることを意味するのである。「たんのうは前生いんねんのさんげ」とのお言葉に伺えるように、成つてきた事柄を、成るべくして成つたものと受け止め、その因つてくるところを思案し「たんのう」すること、そこに運命の切り換わる道が開けてくると諭されている。(三六)

今現在は、特に新型コロナウイルスの影響で、外に出歩くことが減り、その分夫婦や家族で過ごす時間が増えた。それはつまり、少し厳しい言葉で言うと、今までは見えてこなかった、あるいは目を逸らしていた問題に、目を向けなくてはならない、ということでもある。しかし、親神はその人その人の成人度合を見て、それに見合ったふしをお与えになる。「おさしづ」の中にある「出けんたんのう」というのは、

私たち人間の通常の常識ではどうにも分からない今生の現実の姿を、全て見抜き見通しの神の親心に基づく試練として、前向きにありがたく受け止めることによって、前生における魂の汚れも濁りもすつきり美しく洗い清められ、本来の陽気な姿によみ返ることができる。つまり、真の「たんのう」とは、この世の次元を超えた「魂」の世界にまで目を開いてこそ初めてできるものなのである。(三七)

夫婦の中、人を見るやない、聞くやない。もうこれからという理を改めるなら、生涯という。(明治24・11・8)
所々に一つの芯を治めて貰いたい。これまで運んだる処で、又一つ／＼通り来てある処、この度、夫婦揃うて、心一つに定めて貰いたい。……夫婦の中、一つ早く聞き取りて、いつ／＼までも仲好うと。(明治21・7・15)

この「おさしづ」のように夫婦は、互いが鏡のようなものである。だからこそ、他人を見てとやかく言うのではなく、互いの姿を見て「いんねん」を自覚し、前生の「いんねん」をさんげして夫婦そろって心を治めることが肝心なのである。また、私たち人間は、一代限りで終わるのではない。親から子へ、子から孫へと伝わる理がある。また、自分の身体は、本論文にも述べた通り、親神からのかりものであるの、いずれはお返しする日がくるのであるが、魂は生き通しであり、魂が生まれ変わりを繰り返して、今日の私たちがあ

る。つまり、その魂には理も今まで積んできた徳も「いんねん」も備わっているということが明示されている。(三八)

人間というは、一代とと思うから頼り無い。理は末代の理。これをよう聞き分けて、しっかりと治めてくれ。尽くした理は、将来末代の理に受け取りてある。理消えやせん程に。理は十分の理である。これを楽しんで、一代の理に悔しいと思うやない。これをよう聞き分け。人間というは、早い者もあれば遅い者もある。これを聞き分けて心に満足せい。たんのうが第一である。これを前生のいんねんのさんげと言う。(明治37・12・31)

第二節 夫婦の心遣い

夫婦の間の補足性について、「おさしづ」では、

夫婦の中より一つという。あちら見るこちら見る、どうであろう、こうであろうか、言うまでや。さしづするまでや。あちら言えば又こちらという。あちらこう。こちらこう、見分け聞き分け、扶けやい／＼。(明治25・2・23)
まあ夫婦心に喜び満足供えにやならん。(明治32・12・24)

とあるように、世の中の治まりは、夫婦の心が一つに治ま

ることが大切で、例えばどちらかに起こった身上・事情、あるいは家族、教会に起きた時、お互いにたすけあいをしていかねばならないことを示されているのである。そして、自分の満足のために相手に求めるのではなく、双方がいかに心に喜びを与え合うことが大切なのかを説かれている。さらに、

重荷を人に持たせぬよう、重荷めん／＼持つて扶け合い。
……重荷という、重荷は、めん／＼が持つてするは、これ
神の望みである。(明治33・10・26)

と、双方が重荷を自分が持つという意識、また覚悟が大切であると示される。(三九)

以上が、夫婦が治まっていく上での大切な心遣いであり、これが、心に治まり、実践していくならば、夫婦は必ず治まりを見せ、夫婦の関係は続いていくのである。

しかし、厚生労働省の人口動態統計によると、日本の年間の離婚件数は平成十四年の約二十九万組をピークにやや減少傾向にあるが、それでも毎年二〇万組以上の夫婦が離婚しているのが、今の日本の現状である。(四十)

本教の中においても、離婚に至る夫婦は存在する。そこで、やむなく離婚に至ってしまった夫婦の心の治め方、心の持ち方を「おさしづ」に求めたい。

縁談結んだ事、十年も経てど、未だどうやこうやと心に思て居ては、間違うた心であろう。子供一人二人あれども、あちら離れこちら離れする事ある。一生に一代と言つて結んだ理であろうが。どういふ道もあろう。これ聞き分けてくれ。(明治40・4・8)

夫婦の中切れたという。夫婦の縁は無くとも互い／＼兄弟という縁は結んでくれ。(明治28・5・22)

とあるように、夫婦というつながりは切れることになるが、人間は皆、親神の子どもであり、一れつ兄弟であるから、その縁は切らずにつながっていくと論されている。

せかいぢういぢれつわみなきよたいや
たにんとゆうわさらにないぞや (十三・43)

結論

本論文では、天理教における夫婦観というテーマに沿って、第一章で本教の説かれる「いんねん」、第二章で、「いんねん」に基づく夫婦観について、さらに第三章では前二章を踏まえた上での夫婦の通り方を考察してきた。

本論文を通して明らかになったのは、「いんねん」というのは決して運命などではない。皆対等に親神から身体をお借

りして今日を生きているが、心は一人ひとり同じではないからである。それは、「心一つが我が理」「心の道」と教えられるように、前生での行いの積み重ねによって、今の私たちが形成されている。「いんねん」は、良いことも悪いことも含めて、自分の意志とは関係なく起こってくるものである。

それは、前世での行いが今世に現れた結果であり、お道の言葉で言うと、蒔いた種が生えてきたということである。種は早かれ遅かれ必ず生えてくるものであるから、前生で蒔いた種は今生、または来生で芽が出てくる。そうして私たち一人ひとりの「心の道」は、形造られているのである。

また、「心の道」は、今現在生きている中でも続いており、今生での行いが、次の未来につながっていくのである。だからこそ悪い「いんねん」は納消とまではないかないものの、芽が小さいうちに刈り取ることが肝心なのである。しかし、人間というのは、近しい間柄になればなるほど日々の感謝が薄れ、当たり前前と思うことが増えていくものである。そうした小さなほこり、心の「ほこり」が積りに積もった時、親神は人間が気づいて掃除できるよう、身上や事情を通して「いんねん」の切り替えを促されるのである。

そして、その異なる心をもって歩んできた二つの道が「いんねん」によって引き寄せられ、一つに交わり、結ばれ、ともに歩んでいくのが夫婦である。「この道は夫婦が台」と言われる通り、まずは夫婦の心を治めて親神にお喜び頂けるような通り方をするのが肝心である。しかし、「晴天の中でも

曇りする事ある（明治26・12・16）」の「おさしづ」にもあるように、心にもやががかり、時には互いにぶつかることもあるだろう。それでも神様は、私たち人間に、乗り越えることが出来ないふしを与えられることはない、と仰せられる。

「いんねん」は簡単に切り替わるものではない。ただ、悪い「いんねん」は切らなくてはならない時は切らなければならぬのである。しかし、人間関係は自分都合で切っていくわけではない。自分都合で切ってしまうと、ただ切れていくだけである。『天理教教祖伝逸話篇』「三二 女房の口一つ」の一節に、「治まってから切ってはいかん。切ったら、切った方から切れますで。」（四一）というお言葉がある。その切れてつなげない部分をつなぐことこそが大切になると考える。そのために、神様の教えを聞かせて頂き、練りあい、だんじあいを重ね、たんのうし、治める心が大事になってくるのである。

真実は道の道。しつかり定め、心を定め、しつかり治め。

これよう一つの心定めの道、心いつまでしつかり踏ん張れ。実を定める一つの理、道の道を通す。しつかりと心を定め第一やで。（明治21・3・29）

「いんねん」に引き寄せられ、結ばれた夫婦だからこそ、日々を暮らす中で、互いの「いんねん」を自身の「いんねん」と

諭り、自覚をし、夫婦で心を定めて「陽気ぐらし」ができるよう、親神に喜ばれる心遣いができるよう日々を通らせて貰いたい。

注

- (一) 橋本武人『天理教学シリーズ いんねん 夫婦・親子』天理教道友社、平成七年、五一―五二頁。
- (二) 澤井義則「おさしづにみる夫婦」『あらきとうりよう』二六四号、天理教青年会、平成二八年、三六頁。
- (三) 橋本、前掲書、四九頁。
- (四) 橋本武人「天理教におけるいんねんの教えについて」『天理教学研究』第二四号、天理教道友社、昭和五六年、四十頁。
- (五) 橋本、前掲『天理教学シリーズ いんねん 夫婦・親子』、十六頁。澤井義次「いんねん」と因縁」『みちのとも』天理教道友社、平成八年十二月号、五三頁。
- (六) 天理教教会本部『天理教教典』天理教道友社、平成二四年、二五頁。
- (七) 山本久二・天・中島秀夫『天理教教典講座』天理教道友社、昭和四七年、七七―七八頁。
- (八) 上田嘉太郎『おふでさき通解』天理教道友社、平成二

九年、四九八頁。

- (九) 天理大学付属おやさと研究所編『天理教事典 第三版』天理大学出版部、平成三十年、六七頁。
- (十) 橋本、前掲『天理教学シリーズ いんねん 夫婦・親子』、二四―二五頁。澤井義次、前掲書、五三頁。
- (十一) 橋本、前掲『天理教学シリーズ いんねん 夫婦・親子』、三一―三二頁。
- (十二) 田中喜久男『ほこりといんねん』天理教道友社、平成七年、四一頁。
- (十三) 澤井義次、前掲書、五三頁。
- (十四) 深谷忠政『天理教―全人類最後に求めるもの』(改訂新版) 天理教道友社、昭和三九年、一八一―一八二頁。
- (十五) 深谷、前掲書、一八二―一八三頁。
- (十六) 上田、前掲書、一四〇頁。
- (十七) 上田、前掲書、一四二頁。
- (十八) 上田、前掲書、四一頁。
- (十九) 上田、前掲書、三八頁。
- (二十) 深谷、前掲書、一八四頁。
- (二十一) 天理教教会本部「三一 天の定規」『稿本天理教祖伝逸話篇』天理教道友社、平成十九年、四十九―五十頁。
- (二十二) 田中喜久男「因縁の教理「心のおしん」」『みちのとも』九月号、天理教道友社、十八頁。
- (二十三) 堀内みどり「夫婦 ―「陽気ぐらし」の原点―」『天理教学研究』第三六号、天理教道友社、平成十年、三六頁。

- (二四) 澤井義則、前掲書、三八頁。
- (二五) 澤井義則、前掲書、三六、三七頁。
- (二六) 上田嘉太郎『みかぐらうた略解』天理教道友社、平成三十一年、十六頁。
- (二七) 天理教会本部『天理教教典』天理教道友社、平成二十四年、二五―二七頁。澤井義則、前掲書、三六―三七頁。
- (二八) 澤井義次『天理教教義学研究 生の根源的意味の探求』天理教道友社、平成三十三年、一一三―一四頁。
- (二九) 上田、前掲書、七六―七七頁。
- (三十) 上田、前掲書、一六一―一六二頁。
- (三一) 松本滋『「かしの・かりもの」の心 一付「いんねんの自覚を指して」』善本社、平成九年、九一頁。
- 矢持辰三『天理教の人生観』天理教道友社、平成十二年、九三頁。
- (三二) 澤井義則、前掲書、三八頁。
- (三三) 堀内みどり「夫婦 ―「陽気ぐらし」の原点―」『天理教学研究』第三六号、天理教道友社、平成十年、三八頁。
- (三四) 堀内、前掲書、三八頁。
- (三五) 橋本、前掲書、七三頁。
- (三六) 天理教会本部「たんのう」(tenrikyo.or.jp)
- (三七) 松本、前掲書、九九頁。
- (三八) 松本、前掲書、九六頁。
- (三九) 矢持、前掲書、一三四―一三五頁。
- (四十) 森義博「ライフプランと離婚」『あらしとよりよう』

二八二号、天理教青年会、令和三年、十六―十七頁。
 (四一) 天理教会本部「三二 女房の口一つ」『稿本天理教教祖伝逸話篇』天理教道友社、平成十九年、五一頁。

参考文献

- 「おふでさき」
- 「みかぐらうた」
- 「おさしづ」
- ・橋本武人『天理教学シリーズ㊸ いんねん 夫婦・親子』天理教道友社、平成七年。
- ・橋本武人「天理教におけるいんねんの教えについて」『天理教学研究』第二四号、天理教道友社、昭和五六年。
- ・澤井義則「おさしづにみる夫婦」『あらしとよりよう』二六四号、天理教青年会、平成二八年。
- ・田中喜久男『ほこりといんねん』天理教道友社、平成七年。
- ・田中喜久男「因縁の教理―心のふしん―」『みちのとも』九月号、天理教道友社昭和二八年。
- ・澤井義次「いんねん」と因縁『みちのとも』天理教道友社、平成八年十二月号。

- ・澤井義次『天理教教義学研究 生の根源的意味の探求』天理教道友社、平成二三年。
- ・山本久二夫・中島秀夫『天理教教典講座』天理教道友社、昭和四七年。
- ・上田嘉太郎『おふでさき通解』天理教道友社、平成二九年。
- ・上田嘉太郎『みかくらうた略解』天理教道友社、平成三一年。
- ・天理大学付属おやさと研究所編『天理教事典 第三版』天理大学出版部、平成三十年。
- ・深谷忠政『天理教―全人類最後に求めるもの』（改訂新版）天理教道友社、昭和三九年
- ・天理教教会本部『稿本天理教教祖伝逸話篇』天理教道友社、平成十九年。
- ・堀内みどり「夫婦―「陽気ぐらし」の原点―」『天理教学研究』第三六号、天理教道友社、平成十年。
- ・天理教教会本部『天理教教典』天理教道友社、平成二四年。
- ・松本滋『「かしまの・かりもの」の心―付「いんねんの自覚を指して―』善本社、平成九年。
- ・矢持辰三『天理教の人生観』天理教道友社、平成十二年。
- ・森義博「ライフプランと離婚」『あらかとよりよう』二八二号、天理教青年会、令和三年。

麻島隆史	創設から考察する天理ラグビーの歴史と意義	酒井和慶	ヴィクトール・ロ・フランクルの生涯と信仰―夜と霧―を中心に―
池田 敦	日本における政教分離の変遷	佐藤 直	現代日本における宗教の課題―オウム事件を中心に―
池田武尊	宗教とオリンピック―初期のオリンピックの歴史から学ぶ―	佐藤善治	大本の活動展開における思想の“ブレ”―万教同根―による軸の変化―
石村翔真	廃仏毀釈における民衆の動向―水戸・長州・薩摩の廃仏毀釈と民衆の関わり―	高橋 良	天理教の「死生観」―生と死―に関する天理教の教えとは―
井上康平	イタリア中頃ルネサンス期におけるイエズス像―レオナルド・ダ・ヴィンチとミケランジェロを中心に―	高見大成	船場教会のロンドン布教の天理教的意義
梅谷秀衛	コロナ禍の天理教―各教会の実践を通して未来について考える―	竹野美幸	かんろだいと真柱―信仰の中心を求めて―
大藪達行	遠藤周作の信仰をめぐる一考察―母なるもの―の理解を中心に―	立岩 誠	天理スポーツと天理教の身体観
梶村雅史	証拠守りの展開と意義	佃 隆司	生まれ変わりの思想―リインカーネーションから考える―
梶本和行	日本人の沼と宗教	寺田辰吉	寺田家が頂いた「おさしづ」の理解
姜仁 寧	韓国キリスト教の伝来―宣教師の宣教とその影響について―	寺西元喜	天理教の里親における里子への影響とは
古賀一成	こぶき話の研究―明治十四年山澤本の解釈を中心に―	檜橋昌弥	身上たすけと入信の契機―深谷源次郎の身上伺いから考える―
		林 亮輔	「ふし」について―斯道会の伝道から学ぶ―
		原田智弘	ポップカルチャーにおける龍の表象
		東原壮佑	無宗教」を標榜する大学生の宗教観

増田壮剛
松尾勇斗
宮里和希
山本泰三
脇晴香
大塚元嗣

松下電器と天理教の組織構造
甲子園の魔物について
沖縄の天理教の実態
伊勢神宮と信仰
天理教における「いんねん」と夫婦観
宗教とオタクの聖地巡礼

【成人会より】

成人会委員長として一年を通して感じたこと

六十九代成人会委員長 松川 高洋 テオ

私達六十九代成人会は、去年につづき、コロナウイルスに翻弄される年になりました。しかし、昨年出来なかった行事を今年こそたくさんやるぞ！と意気込んで、毎月一回は行事をしようとしていました。

ですが、コロナの影響で同級生、後輩が成人会から離れてしまい、例年通り行事を沢山開催するには難しい状況でした。

また、幹部全体の引継ぎがなかなかうまくいかず、仕事量などの偏りが生じてしまいました。私自身も人をまとめた経験がなく、うまくみんなを導くことができませんでした。

そんな中、先生方、先輩、同級生、後輩のお力添えを頂

いて、少しではありましたが、行事として、ゴミ拾いや、神流し、スポーツ大会などを開催することができ、沢山の学生に参加してもらうことが出来ました。

コロナ対策もあり、一つの行事をするために一ヶ月前から準備をして、学生一人一人に声かけをしました。私が一年生の頃は、参加する側で、運営の人の気持ちなんて考えたこともありませんでした。こんな大変なことを先輩方はやってきたのかと考えると、私達ももつと頑張らないといけないという気持ちになりました。

この年は、コロナの影響で思うようにいかないことが沢山あり、不足に思うことも多々ありましたが、今思うところの年に成人会の委員長をやらせて頂いて、本当によかったと感じています。

例年、当たり前のように行えた行事、学生生活が当たり前ではないのだなと心から感じる事ができたとともに、自分ひとりの力では何もできないと深く感じました。本当

にみんなの協力のおかげで次の代へとバトンタッチができたと思っています。

心からの感謝の気持ちでいっぱいです。今後の成人会の更なる発展と親睦を願いつつ、六九代委員長挨拶とさせて頂きます。どうもありがとうございました。

二〇二一年度 成人会 活動報告

七月四日 バレーボール大会 三島体育館

十一月五日 天理高校一年生用木コースとのコラボ
授業ひのきしん

十二月二日 三昧田神名流し、ゴミ拾い

十二月十九日 成人会運動会 第二体育館

一月一日 幹部交代式 宗教学科共同研究室

二〇二一年度 成人会役員

委員長 松川高洋テオ

副委員長 柴垣有希

副委員長 小西哲平

情報宣伝 横山基生

庶務 岡崎星空

書記 岩切寿代

会計 服部憲亜

渉外 鬼武駿一郎

【会員の声】

成人会で学んだこと

三年次生

柴垣有希

第六十九代成人会の副会長として、一年を通らせていただきました。六十八代の先輩方から六十九代へ受け継いだ当初は、体育祭やこどもおちばがえりのバラエティひのきしん、学祭などといった行事を通して、より深く私自身が成人する共に、成人会の楽しさや、その存在の大切さ後輩に伝え、次の代へと繋げていきたいと考えていました。しかし、新型コロナウイルス感染拡大によって、行事をする事もままならず、学校へ講義を受けに行くことも出来ない状態が続きました。成人会として歩みを進める以前に、コロナ禍によって後輩の名前も顔を知らないという状態から始まり、これからどうしていけばよいのかと不安でした。

しかし、だんだんとコロナウイルスも落ち着き、学校で

講義を受けることができるようになり、学科会活動も様々な制限の中ではありますが、行うことができました。

今現在も新型コロナウイルス感染拡大が続く一方ではありませんが、この一年、成人会の副会長として通らせてもらい、今自分には何ができるのかを改めて考え直し、その時の持ち場立場でもう一歩二歩、親神様に近付き成人することの大切さを知ることが出来ました。

私自身が思い描いていた成人会の姿とは少し違う型にはなりましたが、後輩が繋がってくれ、六十九代から七十年代へと引き継ぎができました。私の代六十九代成人会副会長としての勤めは終わりましたが、これで終わりではなくここで学ばせていただいたことを活かして、心の成人を終えることなくこれからも通らせていただきたいと思います。

成人会

二年次生 田垣広太郎

私は第七十代の成人会の会長にやらせてもらいました。これから先輩の伝統や意志をしつかり引き継げられるように努力していきます。私が一年生の時は、新型コロナウイルスの影響で成人会の活動ができる状況ではありませんでした。なので、一つ上の先輩の代は、とても辛い環境だったと思います。その中でも、会長を芯に厳しい環境で何が出来るかを考えて、みんなで助け合って成人会の伝統や意志を繋げようとしていました。その先輩たちの姿をみて、私はとても感動しました。私たちの代も、まだ昔のようにたくさん行事ができるかわかりませんが、みんなで協力しあって、今できることを全力でやらせてもらいたいと思います。この成人会の意志、先輩からの想いを下の後輩たちに教え繋げることができるよう頑張っていきます。

成人会について

一年次生 勝見壮

私は、教会の子供としてお道に近い環境で生まれ育ちました。そんななかでお道についてより学びを深めたいと考え宗教学科に入りました。そしてその宗教学科で成人会という学科会の存在を知りました。成人会では学科会として縦横のつながりを深める活動はもちろん、信仰を深める参加等の活動も行っていました。

そのような学科会の活動でしたが、新型コロナウイルスの影響もあって非常に限られた活動しかできない、寂しい状態になっていました。しかしそのような限られた状況の中でも、成人会の先輩方は自分達のできる限りの活動を考えて熱にあふれた活動をして来られました。そんな先輩方の後ろ姿から、私たち後輩もたくさんのお話を学べています。

今おられる先輩や、歴代の先輩方の伝統を今後の様々な活動を通して後輩に受け継いでいけるように動いていきたいと思えます。





成人 第六九号

発行日 二〇二二年三月一九日

編集 天理大学宗教学科研究室

発行者 天理大学成人会

印刷・製本 天理大学DPセンター